

ダンジョンに俺が出会いを求めるのは間違っている…。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ダンまち』の世界を知る主人公はアニメにライトノベルなどで「ベル・クラネル」を2次元として見てきた。

彼は元俳優と言う職業故に、ベル・クラネルを自分に落とし込める事で、懸命に生きようとする…。

彼にとっては他人の人生でもあり、自分の人生でもある。『僕』から『俺』に変わって、運命に立ち向かう…。

新たな【眷属の物語】を『最期の英雄』が歩みを進める終焉から生まれ物語…。

目次

1話	終焉と起源	離別と邂逅	1
2話	英霊の欠片		12
3話	彼女達に救いを		24
4話	異端児との邂逅		32
5話	アポロンファミリア崩壊		41
6話	新たな歩みと鍛冶師		52
7話	ヘルメスとの邂逅	オラリオ変革の兆し	62
8話	喜怒哀楽		77
9話	クノツソスと妖精の心		89
10話	第一次大鐘戦争		102
11話	新メンバーの急増		113
12話	イシユタルファミリア		122

1話 終焉と起源

離別と邂逅

——俺の名前は鈴堂リンドウ白夜ヒヤクヤ

俺の実家は岡山県にある長船町福岡と言う場所
で福岡一文字派と言う、刀鍛冶の家に生まれた。
小さい頃からお爺さんには小太刀を握らされてい
たのだが、刀術も仕込まれており刀を知らずにと
うして、良い刀が打てる…。

3歳から必死に刀を学び刀術も懸命に学んで居た
が、俺は高校2年の時に普通とは違う家だとやつ
と気付くのだった。

それからの俺は刀術は既に身体の一部になってお
り、今更過ぎて辞めなかったのだが刀の勉強はし
なくなつた。

——東京へ

俺は親の反対を押し切り、東京の大学に進学して
しまうと、実家とは殆ど連絡も取らなくなつてし
まって居た。

大学在学中に知人の勧めで偶然にもエキストラの
バイトを紹介され、その時に撮影中の映画の中で
一言だけ喋る役の人が来られ無く成つて、俺の背
格好が近いと言う理由で、ワンカットだけ出演し
たのだ。

それが俺の人生の大きな転機となり、当時は映画
とは別でドラマの役者を探して居たプロデューサ
ーは、俺に何かを感じアプローチされる。

切っ掛けは凄く些細だが、それを機に俳優として
デビューをした。

あれから3年、俺は俳優として様々な役を演じて居るが、一番多いのは刀を使う大河ドラマや戦隊モノのヒーロー側の役など、今が旬だと言われ俺も気合を入れて頑張ってる。

——収録後の公園のベンチ

俺は疲れてしまっただけでベンチで休憩を取ってから帰ろうと思いき、マネージャーが自販機に飲み物を買に行ってる間に居たのだが…。

目の前で女性が躓き、ヒールが折れた見たいで声を女性に掛けた。

「大丈夫ですか？怪我とかしてませんか？」

俺の声を聞いても女性は一向に振り向く様子がないので、怪我してるのだろうかと思って俺は、彼女の横に行き顔を覗き込もうとした…。

ドスツ…。

俺は急に彼女に突き飛ばされ何故かと思うと、胸部が急に熱くなってる俺は胸元を見る。

「何で…」

「貴方が悪いの、いつも違う女をテレビで抱きしめるから、だから一緒に死にましよう」

彼女は俺のファンの子だろうか、ドラマなんかで色々な女優さんとの恋愛模様の描写がある、それを彼女は言ってるのだろうか。

ふと彼女の方を見ると、小さい頃から良く見ていた備前刀に見えたそれを、自分の首に当てて引こうとしていたので、咄嗟に彼女の持つ刀の刃を両手で挟み刃先を彼女の首と反対に向けた。

そう反対とは俺が居る方だった、挟む力より引く力の方がいくら女性でも強い…。

その状況を分かって居ない彼女は、渾身の力を込めて引き抜くと、挟む力を失った刀は大きく外に膨らむと、俺の首を斬り裂いた。

胸部の出血は小太刀を抜いて居ない為、そこまで酷くは無いのだが、首はかなりの量が出て居るよううで、俺は膝から崩れ後方に倒れ頭を打つ。

頭部も痛むが次第に熱は失われ、遠くから毎日聞いて居たマネージャーの声がする。意識は既に朦朧で手足は動かない…。両親に…。

——ごめん、親不孝で…。

俺が意識を戻したのは3歳の時だった『俺』の名はベル・クラネルと言う名に成っている。

両方の記憶が存在すると言うちよつと、俺は自分の頭を心配した。普通に考えて前世の記憶など持って居るのが異常だ…。

お祖父ちゃんは俺の変化に気が付いて居るのだろう

かは怖くて聞けない、お祖父ちゃんの前では努めて僕を演じては居るのだ。

俺の知る『ダンまち』と言うアニメにラノベの世界だと、ベル君はこうだと言う明確なイメージに沿って役を演じる。

3歳と言う年齢は、自我が少しずつ出来上がって行くので、俺は普通よりは賢いと言う感じで、勉強を行う子だと印象付けして行った。

ベル君で有るので英雄譚が好きで、英雄に憧れて居ると言う事は貫いた、俺が憧れたのは『僕』と言う本当の主人公が居たので嘘では無い。

——英雄になる為

俺は最初は、真っ直ぐな木の棒で素振りをして居てお祖父ちゃんには、僕がお祖父ちゃんをモンスターから守ってあげるんだと言っていた。

事実俺はお祖父さんに凄く感謝している、だからこそ本気で守りたいと思っている。そう思うといつも以上に力が湧いて来る。

——その時はやって来る

アニメなどでも見るお祖父ちゃんの死……。アニメでは生きて居るけど、本当に生きてる保証などどこにも無い、そう思うと俺の心が叫び自分の無力を痛感した。

俺は居ないお祖父ちゃんのお墓を家の側に作ってから、大好きだった団子を御供えして涙を拭う。

家の中に有る貴重品を探して、全て持ち出す事にしていたのだ。家自体は管理して来れるそうなので、安心は出来るのだが、欲しい人が現れたら仕方ない。

荷物は10歳の時の誕生日に貰った刀と、2万ヴァリスに宝石が3個と、お祖父ちゃんが良く眺めて居たブレスレットと日記帳に手入れ道具。

馬車は初めてで正直快適とは行かない、途中でモンスターが出て来ると『俺』が倒す。今回の乗り合い馬車の護衛をする事で、無料にして貰ったからには勤めははたす。

1週間の道のりで、俺は護衛の為に夜間は起きて居るので日中は眠って居る。夜間は暇で日記を読んで居ると思ってしまう、大切にされて居たのだと。

—— 迷宮都市オラリオ

1週間の間にはミノタウロスまで出現して、正直かなり焦ったが、普段の鍛練通りを連想して気持ちを下ろち着かせて斬り伏せた。ダンジョン外は弱いと言っただが確かに、強くは無かったかな。

どうにか無事に着いて来れて本当に良かった、以外に多くのモンスターに出会ってしまい、無事だったのだから自分を褒めたいぐらいだ。

そう思つて居ると、馬車の御者のおじさんが、今回無事に来れたのは俺のお陰だと言つて、3000ヴァリスを駄賃として受け取つた…。

俺は自分の見た目では、他のファミリアは無理だろうと理解している、髪は肩口まで伸びてお祖父ちゃんが女性に上げる筈だった、髪留めは綺麗で結構高価な物だろう。

始めはお祖父ちゃんに言つて切つて貰う様に頼んで居たのだが、お祖父ちゃんが「駄目じゃ」と言い切つて来れなくなつた…男の娘だよね…まさか…。

(違うよね…違うと言つてよお祖父ちゃん…)

現実逃避は辞めて、じゃが丸くんの屋台に向かつて歩いて行く。ここでヘステイア様に会えるはずだと思つて、遠回りルートをせずにここに来た。

「いらつしやいませ〜」

「すみません塩味1つ貰えますか?」

「はい!ありがとうございます」

「すみません【万神殿】はどう行けば良いですか」

「君?!冒険者志望かい?」

そこにはアニメに登場するヘステイア様よりも、実物の方が可愛いヘステイア様が目の前に居た。纏う気配はやはりお祖父ちゃんと一緒だな。

「え?はいそうです、先程着いたばかりです」

「そうかそうかく君に是非、僕のファミリアに入つて欲しい」

「えっ良いんですか?こんな俺で良ければ宜しくお

「願います神様?」

「おぼちゃんごめん! 少しだけ外して良いかい?」

「仕方無いね、折角の勧誘成功だ今回だけだよ」

「ありがとうおぼちゃん、では少し良いかい?」

「はい、あの神様? 大事な事忘れてますよ」

「何だい? まさか辞めるとか言うのかい?」

「いえ、俺はベル・クラネルです」

——書店の2階

「じゃあ、今からベル君に【神の恩恵^{フエ}】を刻むよ」

「俺はどうしたら?」

「そこに上を脱いで、うつ伏せになってお来れ」

「はい、神様」

ヘステイア様は俺を見るなり「へ?」って顔してるよね…。絶対に女の子だと『俺』っ子だと思っただ顔を俺が見つめると、ゆっくり目を逸らす。

ベル・クラネル

L v l — ■ ■ ■ 人

力 — I 0

耐 — I 0

器 — I 0

敏 — I 0

魔 — I 4 5

《魔法》

アルパノクティ

【白夜】

・ 光属性：付与魔法、光速移動可能、認識阻害
超短文詠唱：【精霊の威厳】ジンデインダス

□ □

《スキル》

【羨望一途】

- ・ 早熟する
 - ・ 想い焦がれる程、効果は上昇
 - ・ 運命の裁断、運命を超える事で【経験値】エクセリア上乘せ
 - ・ 副次効果で精神干涉【魅了】チャームなどが効かない
- 【精霊の家】
- ・ 護りたい者を守る時、全アビリティ超上昇
 - ・ 直感、本能が上昇し危機を予感する
 - ・ 護りたい者への想いで効果上昇

ヘステイア様は何か誤魔化せた、そう思ったのだろうか、俺は忘れないだろう恩恵を授かったこの日の出来事を…。

「なっなんだいこれは!？」

「どうしたんですか神様?」

「ベル君、初めから魔法があるんだ、それに初めか

らスキルが2つもあるんだ…それに」

【神聖文字】ヒエログリフで読めるので、見せて下さい?」

「神様…俺って人ですよね……」

2人で悩んでから、スキルも種族も周りには黙って居た方が、俺の為だとヘステイア様に言われて、納得したので了承する。

まだ昼前なので、ヘステイア様は早くバイトに戻らないと行けないから、ホームである廃協会の場所だけは案内して貰うと、俺が用事等が済んだら戻っておいでとヘステイア様は言うと、手を振って仕事に戻る。

時系列で言うとな、『ダンまち』より3ヶ月は早くオラリオに来て居る筈だ、俺がベル君の様に出来るか不安で、早くやって来たのだ。

——
【万神殿】
バンテオン

ギルドの受付は、見目麗しい人員を配置して居るのだろうか？誰を見ても綺麗な人が可愛いのだ。

受付カウンターに向かい、話し掛けて見ると振り返った人物は、エイナ・チュール他の人よりも圧倒的に美人だと思った、眼鏡が無い方が可愛いだろうな

「すみません、冒険者登録をお願いします！」

「はい…ではこちらにお名前に所属ファミリアを」

記入下さい…はい確認しました。では今後担当させていただきます、エイナ・チュールです」

「宜しく願います。ベル、ベル・クラネルです

ね！これからお願いしますエイナさん…後は喋り方普通で良いですよ」

「うん、宜しくねベル君…ダンジョンについての情

報収集をしてたりするの？」

「はい、情報は生き抜く為の装備ですから、モンス

ターなんかの情報とかは、手に入るんですが、地図

だけがどうしてもオラリオに來ないと無くても」

「若いのに偉いわね、地図以外には何か分からない事はあるの？」

「情報の異なりが無いかの確認って出来ますか？」

「ええ良いわよ、見た目が頼りないのにしつかりして

てるのねベル君って」

「それ褒めてる様でプラマイゼロですから」

「そっそうねごめんね」

「では宜しく願いします」

その後、資料と地図の写しを上層全てを貰い、バベルのヘファイストスの新人向けのお店で、ヴェルフ・クロツゾの【兎鎧】ビヨン吉を買うと、早速ダンジョンに向かう事にした。

ここから【眷属の物語】フェアミリアマミスが俺の物語が始まる

その前に屋台で昼食を摂ってから、バベルのダンジョン入り口を目指す。昼食時と言う事もあり他の冒険者は、誰も居ないので気兼ね無く戦える。

俺の心は高揚と程よい緊張感が身体を巡る、いつも通り以上に動けるのは、恩恵による一般から冒険者の能力値が上がったからだろう。

1〜3階層はゴブリンとコボルトだが、最弱でも集団になると油断は禁物だ、俺はアビリティの上昇を最大限に上げる為に、多彩な動きでモンスターを斬り裂いて行く。

「そりゃ…ちよつと来過ぎたかなあ〜」

それもそのはずだろう、初日で5階層まで隈なく走ってモンスターを狩って来た。手で持って運んできたバックパックも、真っ直ぐ地上を目指したとしても一杯になるだろうから、ここで引き返そうと踵を返し地上を目指した。

2話 英霊の欠片

地上に戻ると換金所に向かって歩く中、周囲の人々を見て居ると、急に俺は頭が割れる様な痛みを感じて、意識が朦朧とし始めた…。

俺は気が付くと、病院の様なベットで横になつて居る事に気付く、周囲を見ると横にバツクパツクが置いてあるので、襲われた訳では無い様だ。

数分程は自分の記憶を辿って見るが、これと言つて何も覚えて居ない…。

「どこだ、ここは…」

「起きて…良かた」

声のする方に顔を向けると、カーテンの向こう側に声の主はいる様で、この状況が何なのか聞いて見るしか無いよな。

「すみませんが、俺は何故ここに…」

「覚えて無いの？私が…君の近くを通る時…頭を押

さえて苦しんで、気絶したよ…」

「原因って、分かつてたりはしないですよね…」

「多分…分かる、かな？」

「教えて貰えませんか？正直言つと不安何ですよ」

「良いよ…多分…精霊の血が、原因…かな？」

「精霊？うくん、俺の出生に関する事が何も分からないので、精霊の血が入ってるかが、分から無いんです…」

その声の女性は、カーテンの向こう側からこちらに現れた。

「アイズ・ヴァレンシユタインさん」

「私の事、知ってるの？」

「アイズさんは有名ですからね」

「君は…他に精霊の血が流れた人に、今まで会った

こと…無いの？」

「はい、辺境の村から出た事が1度も無くて、誰か

を守る…：貴女のような人を、守れる英雄に成る為に

俺はオラリオに来たんです」

「えっ…：ええつと…：／／」

「あつすみません、急に変な事言い出してしまつて

からに、何故か…」

俺は、急に彼女から目が離せ無く成つてしまい、手を伸ばし彼女の手を握って居た…。確かにアニメなどでアイズが可愛いとか思つてた。

実際に会つて綺麗だと思つた、でも守りたいとか今の俺が言つて良い事じゃ無い、それでも離したく無いと心が言つて来る。

「アリア…：会いたかつた…：君に、もう失いたく」

俺はそのまま気を失つた、俺の意思と関係無く勝手に動いていた…。

目が覚めると、そこにはヘステイア様が手を握つて眠っていたのだ。あれは夢なのだろうか、懐かしい風を感じてた…。

会いたいアリア…。

俺の奥で呟く声、この声は誰だアリアはアイズさんのお母さんの名前だ。

疑問が増える夢？

俺は、カーテンの隙間から差し込む陽の光を見ながら、夢の内容を思い出す中で、急に頭痛が激しく成って行き堪らず、声を漏らしてしまう。

「ううう…がっあああああああああ」

「どっとうしたんだい!? ベル君！ベル…べ…べ…」

ここは？

見た事も無いその景色、周囲の木々は燃え上がっている。肉の焦げる匂いだが直感で、これは人だと分かってしまった…。

今度はどこだ？

シーンが切り替わる様に風景が変わる、俺は目の前に居る何かに向かって叫ぶ…。俺の後ろからは愛する風を感じ、前に突き進む…。

眩い光が俺を包む、これでもう俺は…。

重い瞼を開くと、昼間なのかずっと眠っていた様に眩しい、身体が怠くて高熱で寝込んだ後の様で、思うように動かない。

周囲の状況を確認するが、昨日のベットとは違うのが分かったが、それ以外何も分からない。

そうだ帰らないと、神様が心配してる筈だよな、怒ってるだろうから何て言うか考えないと、持病の癩

が何て通用しないな。

立ち上がろうと、ベットから足を下ろして前に踏み出す…。俺は力が上手く入らずに、前方の壁に向かって転びそうになって、手を前に突き出す。

管の様な物に引っ張られて、腕が前に出なくてぶつかってしまふ。顔面は何とか頭を出して回避したのだが、頭が痛いし壁にヒビが入ってしまった。

バタバタ

遠くから誰かが走って来る、俺は頭部を押さえて壁に手を付いて立ち上がると、扉を勢い良く開けてヘステイア様が涙目で、目を真っ赤にして入って来たのだが、俺を見ると肩を震わせて下を向く。

「どれだけ僕に心配させたら気がすむんだい!？」

下を向くままで床に向かって涙が落ちる。俺は状況から言って、1日では無く恐らく数日は眠っていたのでは無いかと思う。

「ヘステイア様、ただいま帰りました…」

「お…おか…おかえり…ベル君…」

「何日、経ってますか？神様」

ヘステイア様は泣き叫び話にならず、ミアハ様が部屋に入って来ると、説明してくれたのだが、思ったよりも長かった…。

「当日含めて7日ですか」

「何が有ったのだ？身体に異常は特に見当たらなか

ったのだ、恐らくは心的な出来事が起因だと言うのが、医者としての判断だ」

「良く分からないんです、自分がどうしてこう成っ

たのかが、最後にアイズさんと話してた筈ですが」

あれから何度かアイズさんと【九魔姫】^{ナインヘル}リヴェリア

・リヨス・アールブさんが、お見舞いに来て下さったと聞かされた。みんなに迷惑を掛けたのだと分かって、俺は申し訳ない気持ちで一杯に成った。

ヘステイア様も落ち着き、あの日最後に会ったのはアイズさんでは無く、ヘステイア様だったらしいのだが、起きて直ぐに呻き声を挙げて、気絶してしまふと、不安に成ったヘステイア様が、ギルド員の方にお願ひしてミアハ様が診察したらしい。

大方の話は済んだが、何も分からない事に変わりは無く、今後の経過観察しか出来ないそうだ。ダンジョン探索をする前から更新して居ないステータスの更新をして貰う事に…。

ベル・クラネル

L v 7 | ■ ■ ■ 人

力 | B 7 0 6

耐 | C 6 5 3

器 | S 9 8 2

敏 | S 9 3 4

魔 | B 7 1 8

劍士 : S

幸運 : A

耐異常 : B

精癒 : D

共闘 : E

守護 : F

《魔法》

アルパノクティ

【白夜】

・ 光属性 : 付与魔法、光速移動可能、認識阻害

超短文詠唱 : 【精霊の威厳】
ジンディニタス

□

□

《スキル》

【羨望一途】

・ 早熟する

・ 想い焦がれる程、効果は上昇

・ 運命の裁断、運命を超える事で【経験値】エクセリア上乗せ

・ 副次効果で精神干渉【魅了】チャームなどが効かない

【精霊の家】

・ 護りたい者を守る時、全アビリティ超上昇

・ 直感、本能が上昇し危機を予感する

・ 護りたい者への想いで効果上昇

【英霊の欠片】

・ 護りたい者の命が失われると、己の魂が壊れる

・ 愛が深まる程に相手の思考が分かる

・ 不条理を覆すチャージ権を能動的に使用可能

「……………」

「ベル君、君は人間かい？」

「神様、俺は人間では無いかも知れない…あはは」

「僕が思うに、ベル君はアイズ何某と会ってからおかしくなっただんだ…。英霊にアリア」

「英雄アルバートですか？」

「ああ！この説明文から読み解くと、そういう解釈が出来るだろうね」

「アイズさんがアリア何ですかね？」

「それは僕にも分からないよ、可能性としてベル君のステータス値を考えると、無関係では無いと言えるかな、ロキの…グヌヌヌ」

その日は、ヘステイア様がロキ様に会って話をして見ると言うのと、急いで出て行った。ミアハ様が入れ替わりで入って来ると、脈拍を測って行かれた。昼食が終わる頃に、ドアがノックされて返事をするのと、そこにはアイズさんとロキ様にリヴェリアさんが来ていた。

「大丈夫…かな？」

「はい、ご心配お掛けしました」

「うん…：…良いよ」

「ひとまず紹介させてやあアイズたん!？」

「うん…：…分かった」

「ウチは「ロキ様にリヴェリアさんですね」…：…」

「知っていたのだな」

「有名ですから知ってますよ」

「ううっそれだけやないって感じかいな」

「そうですね、ヘステイア様は？」

「今ドチビは「普通に呼んで下さい」…ヘステイア

は下でミアハと話しとるわ」

「呼んで頂けますか？」

「少し「どうぞへステイア様」やりにくわあ〜」

俺は急に全てが鋭敏に成った様で、気配なども直ぐに分かってしまう。へステイア様が入って来たよう
で確認を取ってから話そうと思う。

「へステイア様には、実はお伝えしてない事が2つ程有ります。かなり異常な話しと、驚く話しが有りますが、それをロキ様達にもお教えて良いです？」

「……仕方無いだろうね、今更足掻いても、関係無いなんて言えないだろうからね」

「軽い方から行きましょうか、確認ですがゼウス様ってどんな見た目ですか？」

俺は大神ゼウスの特徴を、2人に聞いて聞いて見るのだが、特徴は間違いなくお祖父ちゃんだな、なら確定で良いだろう。

「特徴は俺の育ての親で、お祖父ちゃんですね」

「なんだって（なんやて）」

「俺の出生の内容を、1番分かるのはお祖父ちゃんですから、探すしか無いです…ヘルメス様にでも頼みましようか？」

「はあくてことは今は何処におるか知らん言う事でええんやな？」

「ゼウスが育てた……こんなに真っ直ぐな子を…」

「そこちやうやろ気にすんのは!?!」

「お祖父ちゃんは俺が村を出る1週間前に、モンスターに襲われて崖から落ちたらしいです」

「送還されてへんって事は、生きてる言う事やな」

そこまで話し終わると、みんなが椅子に座って無い事に気が付く。へステイア様に頼んで、ミアハ様に椅子を用意して貰って続きを話す。

「次はお祖父ちゃんである、ゼウスは気付いて居るかも知れませんが、伝えた事は無いです。3歳ぐらいですかね、前世の記憶があると、自覚したのですが、上手く誤魔化しては居ました」

「爆弾やなほんま…」

「そうか、何となくだけど老成してるとは思ってたんだよ」

「でも前世は、23歳で殺されてしまいました」

「早いなあ、何でか聞いてええか？」

俺は前世の話を役者の辺りから始めた、聞いていた他の面々は、文化の違いに衝撃を受けていて、俺の細かな内容に、神で無くとも嘘で無いと見抜く…。

「気持ち的には信じ難い話しやけど、神でのうても

この話は細部まで細かいやん、それが嘘やったら逆に話し作りの才能あるっちゅうレベルや」

「僕も信じ難いが嘘がない」

「ねえ…ベルは…誰なの？」

「今から推察ですが話そうと思います。その前にアイズさんは聞かれたく無いだろう質問をしますがいいですか？」

「……うん」

「貴方は、英雄神聖譚のアルバートの家族で、風の
大精霊アリアの家族でもある」

「……うん」

「ごめんなさい……家族はご存命ですか？」

「……お父さんは…亡くなってる…お母さんは分からない」

アイズさんは凄く泣きそうな顔で俯く、その手を握って「すみません」と言うと、彼女は首を横に振っ

ては来れるが、震えているので手はこのまま続ける

「神様達に質問しますが、輪廻転生の仕組みってご存知ですか？」

「大まかになら知ってるで」

「お願い出来ますか？」

「人は死んだら魂魄になる、簡単に言うたらエネルギーやな、それが天界で白紙にされて、新たな誕生を待つつちゆう感じや」

「精霊はどう言う存在ですか？」

「ん〜エネルギーの塊やな」

俺は少しだけ考えて、話す内容を厳選して行く、恐らく俺の考え方で間違ってる居ないと思う。

「では考えを言いますね…。」

精霊はエネルギーの塊で、人もエネルギーと魂魄核を持つてる…。

人の寿命ですが恐らくでは有りますが、人はエネルギーを世界に消費する事で、寿命を迎えるが魂魄の部分は天界に行く。

天界はエネルギーの満ちた新たな器に、魂魄を入れる事で輪廻転生を行う。

では精霊は？精霊もエネルギー以外に魂魄核があるのでしようが、エネルギーの大きさが違う事ともう1点決定的に違う事…。

天界に魂魄が帰らない事だと思います。エネルギーが弱った精霊は、沢山エネルギーを持って亡くなった人のエネルギーを拾って回復している。

要は寿命前に亡くなった人の事ですね。

そこで昔バベルが出来る、遙か昔ですが人は今より多く亡くなって、世界にはエネルギーが多かったのでしょうか…。

俺は前世では多くの人の目に留まり、多くの人の応援・羨望・嫉妬などを受けて居た中で、殺されたのですが、それは膨大な崇拜と言っても良いかも知れません。

人の思念エネルギーと魂魄を肥大させる崇拜、それで俺は前世の世界で輪廻転生出来ない、精霊の扱いになってしまう。

俺の居た世界は、人口が増加傾向にある上そこまで危険に満ちて居ない。

答えは分かりましたか？」

神様もリヴェリアさんも驚きを隠せないで居た、恐らくそれで辻褄があうからだろうからだ…。

「大英雄アルバートは、もう随分と昔の英雄ですからね。弱った半精霊に近い魂魄のアルバート。

俺と言う、最近半精霊に成った者の魂魄が、エネルギーを求め1つに成ったが2人とも元人間です。

生まれ来る器に、魂魄が入る前に入ってしまったのではと言う事です」

「ぶっちゃけベルたん学者向きやな」

「俺の世界は、不可思議を解明する事で繁栄した文

化ですから、頭が硬くなる前に今世に来た事で柔軟な発想が可能だっただけです」

アイズは正直、理解出来て居ないのでは無いだろうかと思う。今日では無く違う日に噛み砕いて教えて上げた方がいいだろう。

「ヘステイア様？ステータスはどうしますか？」

「何や問題があるんか？」

「そうだね…正直言つて異常だと思うよ」

「どうしますか？」

「僕が話すよ」

「お願い出来ますか」

ヘステイア様が俺のステータスが、大英雄アルバートに侵食されて、値がおかしい事を説明しているとアイズがこちらを見て来る。

壊れ物を触る様に優しく頭を撫でると、アイズは布団に額を付けて顔を見せない様になっている。ヘステイア様の話しが終わると、今後について話し合う事に成った。

3話 彼女達に救いを

俺の身体は急激な器の昇華で、過負荷に成ったのだろうと思う。ステータス更新からは、あつという間に体調も回復出来た。

ミアハ様とナーザさんにお礼を伝えて、支払いはきちんとするから、少しだけ待って貰う様をお願いした所、払ってくれるならいいわと言われる。

へスティア様達の話し合いは、今日も行う為に【黄昏の館】に今日は来ている。流石にへスティア様と一緒に迷わないのに、アイズは迎えに来た。

「おはよう、アイズって呼んで良いかな？」

「うん：いい、私はベルって：呼んでる」

「ありがとうアイズ」

「アイズは俺がお父さんの魂を奪ってる事をどう思ってるのかな？」

「分かんない：かな」

「正直さ、俺も本当は凄く不安なんだよ、急に強く成ったし大英雄アルバートだって、何と無く分かるから。

刀は使えるけど生き物を斬ったこと無いからか、期待されてもその通りに出来るか分かんない」

「そう：だね」

「でも、それでもアイズを守る事だけは、アルベル

ト・オイゼビウスの魂に誓うよ」

「……うん……ありがとう／＼」

背後から咳払いが飛んできて、ジト目で見られているが、ハッキリ言って仕方無いだろうね。迎えに来

た時から手は繋いだままだし、会話の内容は完全にバカツプルの様な内容だからな。

まだ俺達には、愛とか好きは無いかも知れないけれども、失う訳には行かないと言うのは、分かっているのだから今はそれで良い。

【黄昏の館】に着くと、門番がアナキティさんだっ

たのは少し感動してしまったのだ。客間に案内されるとそこには、【勇者】フレイバーフィン・デイルムナ【重傑】エルガルドムガレス・ランドロックとリヴェリアさんにロキ様がその場に居たので挨拶をする。

「お時間頂き、ありがとうございますベル・クラネルと申します。今後とも宜しく願います」

「僕はヘステイアファミリア主神のヘステイアだよ

ロキ以外は宜しく頼むね」

「ヘステイア様、駄目ですよ…」

「ロキも宜しく…頼むね」

「アンタんとこの子リヴェリアと気が合いそうや」

「そうだな私もそう思うぞ」

そうやって少し茶々を入れながらも、話しをして行く中で、フィンさんは、昨日の解釈は凄く関心したよと言われ、神がどう言う位置付けなのかまで話すと、これでもかと言う程褒められた。

ロキファミリアとの関係は、同盟と言う形を取る事に成った。ヘステイアファミリアは俺のレベルもあるし、大きく成る事が考えられる。

「ではこれから宜しく頼むねベルくん」

「はいフィンさんも宜しく願います」

「んでやヘステイアんとこのホームをどないかせえへんとなああく見すばらし過ぎやわ」

「そうですね、俺がバックパックを何個か持って潜れば、お金はどうか成りませんかね？」

「成るんちゃう？後は人員を増やさなあかんあ」

俺はヘルメス様を使って、アポロンに俺を売り込んで貰えば良いのでは、と言うとロキ様以外は顔が引き吊って居たが見なかつた事にした。

「それええなあ〜アイツやったらベルたんをけし掛けたら、食い付くやろなああ〜」

話し合つてレベルは【戦争遊戯】の【神会】が行われてる最中にしたら良いと言う話に、ヘルメス様は幾らでも動かす材料がある。

その日は、ここまでにすると言う事で俺は、ダンジョンに向かう事にする。アイズは今日は駄目と言われて不貞腐れてしまった。

——リリルカ・アーデ

バベルに向かつて歩いて行くと、そこには大きなバックパックが居る…。もしかしてリリルカ・アーデではと思ひ駆け寄って見る。

「サポーターさんサポーターさん、冒険者を探して

居ませんか？今なら何と、貴女をその沼から救つて差し上げますよ」

「えっ？」

「確かに急に、冒険者が嫌いな貴女にこんな話しをしても、意味が分からないでしょうが、諦める前に最後に信じて頂けませんか？」

俺が差し出す手をじつと見つめて、取るかどうか悩

んで居るが、その反応は普通でしようね。俺は彼女の腕を引き【万神殿】に向かう。

「エイナさくん？ちよつと聞きたい事が有るんですが良いですか？」

「どうしたのベル君？」

「ファミリアって本人の意思を確認せずに入会した場合、そこに退会金を払う必要ってありますか？寧ろ精神的な苦痛に対して賠償、失った時間に対して賠償しろと言いたいぐらいです」

「賠償金は請求出来るわよ、それに恐らくファミリアにはペナルティが科せられるわね」

「後ですね、不当な搾取を受けて居て過去に逃げたんですが、その場所を破壊したりした過去が団員に有るんですよ。

改宗した後に、危害を加えられ無いか心配ですね、その団員はダンジョンで【怪物進呈】パス・パレードで人を殺してると思います。

今すぐどうにかしたいのですが、出来ませんか？」

「少し上に聞いて来るわね!？」

「リリ？誰が【怪物進呈】してるか教えて？」

「……はい」

リリはポツポツとソーマファミリアの団員4名の名前を呟いて行くので「大丈夫だよ」そう言っただけの頭を優しく撫でる。

エイナさんが、数人のギルド職員を連れてこちらにやって来たので、俺はソーマファミリアの犯罪者を名指しして行って、トドメにザニスは横領しており社会的に、許すべきでは無いと伝える。

10分程話しをすると、これから踏み込むと言う流れに成ったので付いて行つた。

ギルド職員は門番に、ソーマ様に会える様に話しを付けると、内部に入ると一斉に捜査を開始して行く中でソーマファミリアの団員は、何が起きてるのかが分かつて無い様子で、ザニスは検挙されて行つた

今日直ぐに、リリとダンジョンに行く事は出来そうに無いのは残念だが、聴取を受けて色々手続きは今日中に可能そうで良かった。

「リリ、俺はベル・クラネル宜しくね…。正直何が起きてるか理解して無いから言うよ？ヘステイアフアミリアに来ないかな？」

リリは少しずつだけど、状況を理解して解放される事に、安堵したのか床にへたり込み、下を向き泣き出した。

またリリの頭を優しく撫でると、ピクツとするがされるがままで抵抗しないので、泣き止むまでリリを撫でると、少し落ち着いて来たのかこちらを見上げて、話し始める…。

「宜しく願います…。ベル様」
「宜しくねリリ」

そうやって俺は彼女に笑い掛けた…。

——リユール・リオン

リリの件は後は任せて大丈夫だろう、今度はエイナさんにフェルズさんを読んで貰う様に、お願いする事にする。と奥にある祈祷の間に通される。

「初めまして、君が呼んだフェルズだがどう言った要件かな?」

「初めましてへステイアファミリアの団長のベル・

クラネルです。大神ゼウスの義孫ですが、今回は取引をしに来ました」

「内容を聞かせて来れないかな?」

「ええ、【異端児^{ゼノス}】の危機に関する情報と引き換え

に、リユー・リオンのブラックリストからの抹消に名誉回復だな。

確かに大量殺人だし、行いは罰せられるべきなのだろうが、彼女のお陰で今のオラリオは表面上は平和だよな?」

相手はアストレアファミリアを虐殺して、リユーは罪に問われる…。剣を取れば殺される事を理解しなければならぬ、当然の事だろう。

それでどうするんですか?」

「価値が分からない物を、許可出来ないだろう?」

「そうか、では失礼するよ」

「まっ待つてくれないか!」

「価値がない物を、取引に使わないだろ?」

俺は、フェルズとウラノスが少し話し合っ居るのを黙っ待っ待っ…。

「良いじゃろう、お主の情報でその件は受けよう」

「そうかなら、直ぐ出来るか? 情報も信頼して口約

束で今教えるよ」

「ああ、直ぐ手配するぞ」

「感謝します。ダイダロスの子孫が人造迷宮クノッ

ソスを建設して居るのですが、ゼノスを捕獲して怪

物趣味の貴族に秘密裏に売って居る見たいです。

クノツソスの入口は18階層の【アンダーリゾルト迷宮の楽園】に有るのと、ダイダロス通りの何処かにあり、そして入口は最硬製錬金属で出来ている様で、鍵が必要だと言ふ事らしいです。情報は足りないかな?」

「いや、重要な情報だとも感謝するよ…」

「心配しないで下さい、俺は貴方達の敵では無いですから、何かをやるなら念入準備して下さい」

「それでは何か有れば、また頼むよ」

「ああ、俺もオラリオは守りたいですから」

そう言つて俺は、祈祷の間を出て行くと【豊饒の女主人】に向かつて歩く。お店に入ろうと入口を見ると、リユー・リオンが客引きをしようとしてる光景が目に入った。

「リオンさんをブラックリストから今日抹消されるでしょう、名誉の回復もギルドが約束してくれましたので、安心して幸せに成つて下さい」

俺は直ぐに、その場を離れようとするのだが、リオンさんによつて阻まれた。

「貴方は誰ですか?何故その様な事を?」

「俺はヘステイアファミリア団長ベル、ベル・クラネルです。何故と言う事ですが、貴女は真面目過ぎるんですよ。誰かがもう良いよと声を掛けて上げないと、前に進めそうに無い…」

貴女は資格が無いとか言いそうですが、幸せになると言ふ事に、資格何て必要無いと 思います。

それに今は大切な友人と、何気ない日々を過ごすと言ふ幸せを手にして居るのでは?幸せは積み重ねの集合体ですから、幸せを拒否すると言ふのは、孤独を選ぶのと同じだと思えますよ。

貴女は生きて行かなければならない、幸せに成る努力をして、笑顔の多い人生を歩むべきです。

それが、アストレアファミアリアの仲間達の願いですからね…生きて…幸せに…これが彼等の心から願いです」

「彼女達なら…言いそうですね…」

「アリーゼさんが目の前に居たら何て言うでしょう」

かね？貴女が触れられる相手が居たら、逃しては駄目よでしたっけ？」

「何故それを貴方が知っているのですか？」

「世界がそう望んだからですかね？俺にも良く分からないんですよ」

「貴方はとても、不思議な人です」

「そうですね、俺自身が変な人間であると自覚して

居ますから！気が向いたらヘステイアファミアリアに来て来れませんか？待ってますね」

俺はそう言うと、今度は止まらずにダンジョンがあるバベルに向かった。

4話 異端児との邂逅

バベルに着くと上の階に有るお店で、バックパックを3つと空瓶を数本を購入して、ダンジョンに降りて行く。

1階層に着くと、今回は魔法を使って一気に下層へと行くつもりでいる。【ジンディニタス精霊の威厳】を始めて展開すると、光の羽衣を着てる様に、ヒラヒラと全身を纏っている様は幽霊見たいだ…。

途中冒険者が居ても、気付かないし壁を走って避けて行く事で、あつという間に17階層に辿り着いてしまった。

巨大な広い空間に、白い壁【嘆きの大壁】に来たが階層主ゴライアスは居ないので、そのまま通過して【アンダーリゾート迷宮の楽園】のある階層をゆつくり見たい気持ちを抑えて、19階層に急いで行く。

1つ目の目的はヴィーヴルを倒す事、発展アビリティの幸運が作用する筈だから、『ヴィーヴルの涙』を狙って居る。

大きな気配を探しながら、走り回って下層へと降りて行くと、21階層にヴィーヴルを発見した、速度を落とす事無く奇襲を掛ける。

胴体を真つ二つにするつもりで、刀を横薙ぎで切り裂くと、普通に斬れてしまう…。これがランクアップすると言う事なのだと言は驚く。

ドロップアイテムは『ヴィーヴルの涙・爪・鱗』と言う具合に全部ドロップした。これならあつと言う間に、上位ファミリアの資金を越えてしまう。

2つ目の目的は、宝石樹の宝石を採取する事、木竜

グリーンドラゴン【トレジャーキーパー財宝の番人】が居るのでついでに倒して行くと、ドロップアイテムなどを回収して行く中、俺から100M程先の場所に数人とモンスターが戦っている。

良く見ると人間側は、黒子の衣装で全て白色と云うかなり怪しい集団だった。先頭で戦う女だけは装備など無く普段着の様な姿だ、角度を変えて顔を見るとヴァレッタ・グレーデ【アラクニア殺帝】未来でロキファミアの数名とリーネ・アルシエを殺害する。

先頭でグレーデと戦って居るのは、リザードマン蜥蜴人、恐らくはゼノスのリド だろうな、人の言葉で指示しているところを見ると…。

【ジンテイニタス精霊の威厳】を使って白装束を全員峰打ちして行くこと、ゼノスは状況が理解出来て居ない。俺は気にせずグレーデを攻撃する。

「おいおい!?何だよテメエは」

「教える意味あるか?ゼノスそいつらを拘束しろ」

「バケモノなんで怪物を助けてんだああ!」

「この場合、お前の方がモンスターに見えるぞ」

リド はチャンスとばかりに、一緒にグレーデを攻撃

すると、俺はLv7でリド は推定Lv5、この状況なの

で奴は即座に逃げようとするが【精霊の威厳】を使

い奴の両脚を切断する。

死なれても困るので、ポジションを脚に掛けてから

腕を折る。「ぐああああ」酷いとは思うが、実際に

【イヴァイルス闇派閥】は人を平気で殺す。油断は俺が死ぬこと

も十分あり得る…。

「リド で合ってるかな?」

「ん?ああそうだがアンタは誰だ?」

「こいつらが居るから言えないけど、骸骨さんの知り合いだから安心して欲しい」

「そうかどつちにしても感謝する…コイツらどうするんだ?」

「地上へのお土産に持って帰るかな」

「くつくく!お土産なあ、ちよつと量が多いが?」

「減らすかな…仕方ないかあ」

俺は取り敢えず、グレーデを気絶させてからリドに監視して貰ってる間に、全員の持ち物を確認して行く事に、装備などでLvを判断してから、白装束を2人程選ぶと、残りの4人を拘束した状態で宝石樹に縛り付ける。

「やる事がエゲツないかな」

「それでも無いだろう?」

「そろそろ行くよ」

「ありがとな!気を付けて戻れよ」

「そつくりそのまま返すよ!」

「確かにそうだな」

俺はコイツらが目覚める前に、地上に戻る為に空のバックパックの1つに、奴等を無理矢理詰め込んでから背負い、前には採取した物を抱く様に背負った。

ゼノスに感謝されて、地上に【精霊の威厳】を最大出力で地上に上がった。【万神殿】までは直ぐに辿り着くと、太ったエルフのロイマンを呼ぶ。

個室で俺は中の奴を出して、生存確認の為に脈も確認して、グレーデの持ち物を全部取り出す。そこにはやはり義眼の様な『D』が描かれた魔導具を持って居た。

念には念をと言う事で、奴らはギルドが管理する牢に、魔法にスキルと恩恵も含め封じる魔導具を、奴等に取り付けてから口内や指先など、自害を凶る物が無いかを専門の職員が行う。

俺はロイマンに連れられ、前回も来た祈祷の間に連れて来られる。そこにはフェルズとウラノスが居て何やら相談しているようだ。

「今回の報告で良いですか？」

「ああ、是非とも頼むよ」

「既に、ゼノスと魔導具で聞いてると思うが、俺がダンジョンで探索中に、偶然怪しい集団がモンスターと戦っていて。

余りにも怪しいから様子を伺ってから、どうするか考えようと思つてたら、ゼノスが言葉を使つてるから、白装束は情報で伝えた奴だと分かつて、後は知つての通りですよ」

「聞いているよ、ゼノスを助けた事を…そこで提案だが是非君には」

「ゼノスとの共存ですよね？良いですよ力をお貸します…。そこで提案があります、モンスターフィリア【怪物祭】の嗜好を変えませんか？」

「と言うと君は協力者を知つてると言う事だな？」

「そうですねガネーシャとヘルメスですよね？」

「まあ、君にどこでそれと言うのは野暮かな」

「先ほどの内容ですが、ゼノスの中でも見た目が人に好まれ易い者を、地上に上げて賢さをアピールする方が、共存には良いと思いますよ？」

「それは面白いのお」

「そうだな…可能性は十分感じるよ」

「俺が企画しましょうか？ロキとフレイアも加えましょう？秘匿は確かに必要ですよ、だが最大派閥を蚊帳の外に置く、それは正直言って悪手だと思えますよ。説明の際は同行しましょう、説得出来ると思つてますから」

「頼もしい限りじやの」

「ええ、彼は彼等の光になるかも知れません」

「大きなお世話でしょうが、光はゼノスの誰かで無くては意味ないですよ。」

「今は人が種族の垣根を越え、共存して居ますが、昔は争つて居たのでしょう？そこにゼノスの共存を説得出来る鍵がありますよ」

「君は面白いですね」

「そうじやな、フェルズあれを渡してやると良い」

「分かりました、ベル・クラネルこれを」

「ノームの貸金庫の鍵と【オクルス眼晶】ですか」

「良く知ってますね」

「貴方が作った物をでしよう？」

「説明は不要ですね？」

「はい、大丈夫ですよ」

俺は受け取ってから、今回の探索で採取した物を換金したので、ロイマンを呼び付ける。若干嫌そうなのは、餓鬼に顎で使われるのが嫌なのだろう。

「魔石の換金と、ヴィーヴルのドロップアイテム全種があるのと、寶石樹の宝石で質は最上級だろうか
らさ、チョコロまかそうとしたらウラノスに言うから
肝に銘じてね」

「なん：だと、ヴィーヴルのドロップ全種：」

「聞いてるかな〜ロイマンさ〜ん」

「ああ、すまないな：『ヴィーヴルの涙』はオーク
ションに成るだろうから、即金は3割のみだ、後だ

手数料が掛かって来る。オークションの手数料だが
な、3%がギルドの規約で決まっている」

「そつかく守銭奴のロイマンさんが本当の事を言っ
ている…だと」

「貴様が脅したのだろうが！」

「まあ良いや、換金をお願いしたいのと、口座を作
りたいからお願い出来ますか？」

「分かった、『ヴィーヴルの涙』は最低買取実績の

18億から、今回は3割支払うからな」

「はい、お願いします」

——換金総額

『ヴィーヴルの涙』

最低買取実績：18億

3割先払い金：5億4000万

オークション手数料：3%

オークション開催予定日

XXXX年XX月XX日（10：15）

※3日後

『ヴィーヴルの爪・鱗』

買取額：780万

《魔石買取額》

特：890万

大：150万

中：42万

小：0

合計：1082万

《宝石類》

1級：1037万

2級：55万

3級：0

合計：1092万

——総額5億6954万

俺は金額を見て、若干どころかかなり引いたけれども、顔には出さずに1万ヴァリス金貨が入った麻袋を受け取った。

1万ヴァリスが5万6954枚あるとか考えると、背中のパンパンになったバックパックが、今より重く感じてしまう。

——駄女神様の遺産（負債）

まだ時間は4時半ではあるが、どうしてもやらないと行けない事がある。ヘステイア様が今までヘファイストス様の脛を、かじって居たそれらの清算を行う事が、急務である…。

じゃが丸くんの屋台に行くと、おばちゃんと一緒に神様は売り子のバイトをして居た。側に寄って行くのと直ぐに気が付き、駆け寄って来るからデコピンで叱った。

「神様は今仕事中ですよ!?!仕事をして下さい、今

日は忙しいですから覚悟して下さい。おばちゃんいつもり神様がお世話になってます」

「気にしなくて良いよ、ちよつと甘えが強いけど良い神様だからね。ヘステイアちゃんのお陰で店も人気が出てるからね」

「そうですね…あの、以前ヘステイア様が屋台の魔石コンロの操作を間違って、屋台が壊れて掛かった費用って幾らです?」

「まっまあ、あれには困ったもんだけど、良いよそんな気に「いえ!お金は大事ですよ」はあく45万だ

ったよ」

俺は背中とは別で持つて居た、100万ヴァリスの袋から50万を支払って、残りのじゃが丸くんを全て買うと伝えると良いのと言いなから包んで来れる。

「すみません、今日は急に神様を早く上がらせて貰って、ありがとうございます」

「良いよアンタが買って来れたお陰で、既に売るものが無いんだから」

俺は神様を連れて、一番初めに向かったのは『青の薬舗』である、前回の払いと壁を壊してしまったのを、支払いに向かう。

「あの時は、色々ありがとうございます。凄く助かりました、じゃが丸くんはお礼に持つて来させて頂きました」

「僕も君達2人には、凄く感謝してるよ。ありがとう、君達が困ったら持つてくれ力に成りたい」

「気にするな2人共、私は医師として当然の事をしただけなのだ」

俺はミアハ様に再度感謝をして、小袋と言つてもそこそこはある50万ヴァリスを支払うと、多過ぎるでわ無いかと言われたが、壁の分に気持ちですと言いつつ、最後は折れてくれた。

『青の薬舗』から出て、生菓子屋（ケーキ屋）に寄つてお菓子を沢山買ってから、ヘファイストス様の元へと向かつて行った。

「ヘファイストスく居るかあゝい」

「へっへステイア!?何しに来たのよ、お金はもう上げないわよ」

「ちっ違うんだよ!?僕はお礼を言いに来たんだ」

「ふくん…。眷属に言われたのね」

「そっそうだけど…気持ちには本物なんだ、僕を信じて欲しい、今まで沢山の迷惑を掛けてしまつて、本当にごめんよ…」

「はあく貴女は良い子を見つけたのね」

「ああ!?見た目は可愛いけど、しっかり物で僕には勿体ない程の良い子だよ」

「初めまして、へステイアファミリア団長のベル・

クラネルと言います。

うちの駄女神が随分お世話になつていた様で、へステイア様と会えたのはきつと、へファイストス様がへステイア様を独立させて来れたからです。

これはそのお礼にと思つて、生菓子ですが良かったら食べて下さい。こちらは駄女神様の迷惑料ですの
で受け取つて下さい」

俺はケーキと一緒に、1000万ヴァリスを差し出すと、若干顔が引き吊りながらも受け取つて貰えたので、これで良しとしようと思つた。

へファイストス様とは、へステイア様がここにいた時の話を聞き、神様には俺のお金で逆戻りの可能性があるがあるので、もしそうなつたら小屋を借りて追い出す事を前もつて告げておいた。

何だかんだ寛いで話していた為に、時間は既に6時半になつており、良かったら一緒に食へに行きましよう
と提案すると、なら共を1人連れて行くわと言う事で【豊饒の女主人】に7時集合になつた。

5話 アポロンファミリア崩壊

【豊饒の女主人】に行くには、早過ぎるので金庫を買ってから一度、ホームに設置する事にした。誰も廃教会に金庫が有るなんて思わないだろう。

早くホームをどうにかしないと駄目だな、ヘルメス様は手配して来れただろうか？近日中には何かして来て欲しい物だ。

手持ちは多めに持って、ホームの廃教会を出発すると、道中でアポロンファミリアの集団が、こちらを伺いながら通過して行った。

仕事が早いヘルメス様良いですね、ベル君がこんなに腹黒いとか嫌ですが、志しは純粋ですから許してくれるだろうか…。

無事に【豊饒の女主人】に着くと、既にヘファイストス様は来られて居た。リユーさんに会釈してからテーブルに謝罪をしてから座る。

「初めまして、ヘステイアファミリア団長のベル・

クラネルです。椿・コルブランドさんですよね？」

「ああ、手前は椿で合っている。聞いて居た通りで

可愛らしい子だな」

「??もしかして、女の子だと思って居ます？俺は

正真正銘の男ですよ!？」

「へ!？」

「髪留めは、お祖父ちゃんの前見だから付けてるだけ、髪はお祖父ちゃんの趣味でしようかね」

俺達は各々で思う事があるのか、空笑いで互いに誤魔化していた。料理を注文しようと店員さんと呼ぶと、来たのはシルさんだった。

「ご注文をお伺いしますね」

「適当に4種類程オススメと、取皿に取り分け用にトングなどありますか？後は：飲み物は皆さんどうしますか？」

「「お酒で」」

「料理に合うので4人分お願いします」

「はい！かしこまりました」

シルさんは語尾に音符が付きそうな返事をかえしてきてくれる。これが小悪魔って奴だなと心で呟きながら「お願いします」と伝えた。

料理を待っていると、お店の入り口付近で騒めきが起きているので、目線を向けるとロキファミリアが入店して来た。

「神様は良い子にお願いしますよ？良いですね？」

「……はい」

「どっちが神なんだか…」

「本当にそうであるな」

席に向かって行く一行だが、直ぐにロキ様が気が付くと、こちらに歩を進め近寄って来ながら、手をブンブン振ってテンションが天元突破している。

「何やく珍しい所で会うなあ〜ファイたんにドチビにそれに椿にベルたくん」

「ロキ様言いましたよね？礼儀は重要だって、その呼び方が許されるのは、2人しか周りに居ない時だけですよ」

「すまんなく」思つて無いでしょ」ベルたんが神の様な対応やあくほんま氣い付けるわ」

「どっちが神なのかしら」

「先程も同じ事を申されておりましたぞ」

「そうね、ロキは遠征の打ち上げかしら？」

「そうやで〜ウチの優秀な子供が無事戻つて来れるだけで、ウチは満足やねんけど」

ロキ様が話をしていると、アイズさんが椅子を持つて俺の横に座る。何も言わずに座るアイズさんを神様は威嚇する様に、俺の腕を抱きしめて唸つてる。

「アイズさんこんばんわ」

「こんばんわ〜ベル、ヘファイストス様と椿…ベルの神様」

「独特な挨拶ね」

「アイズはファミリアの方は良いのか？」

「今回…中堅の小遠征…私が行つてない」

「ははは！お主は相変わらずだな」

「アイズたんをベルたんに取られた〜」

こちらがワイワイして居ると、灰色の狼人であるベート・ローガが噛み付いて来る。他のメンバーも俺を知らないの、戸惑つて騒がしくなつて居る。

「おい！アイズ、そんな弱そうな奴はほっとけ」

「ベル……ベートさんより強い、よっ！」

「はあああ!?!そんな兎見てえな面の、一級冒険者

何て居ねえだろうが」

「関係無い……事実だから」

「アイズ彼が強いつて本当なのかしら?」

「アイズが言つて居る事は本当だ、彼のフアマリア

が私達のフアマリアと同盟を結んだのだ」

「彼は、僕より強いだろうね」

「団長よりですか?」

「ああ」

給仕をするリユースさんも、聞いて居たらしく驚きを隠せないで居る。店内の冒険者が騒めき立って居るが、アポロンの耳に入らない事を願うよ。

結局はロキ様もこちらに座つて飲み始め、椿さんと飲み比べを始める。途中からはティオナさんがアイズさんの横に来たので自己紹介をする。

「それにしてもアイズが、誰かに進んで近寄つて行

くなんて始めてだよね」

「ベルは、特別」

(大英雄アルバートの魂魄が宿つてるしな)

「「「ええええ!?!」」」

ロキフアマリアの団員達(ベート含む)も気になっていたのでだろう、叫び出す団員が割と多い。ベートに關しては流れ弾が当たり、テーブルに頭を打ち付け魂が抜けた様に成っている。

ティオナさんがやたらと絡んで来て、給仕をしているリユースさんが来ると、リユースさんは不機嫌で愛想が凄く悪い、他の人は気付かないのだろうか?

隣のアイズさんが、手元にあるじゃが丸くん擬きを手にとつて、ちよびちよび食べてるのが小動物の様に可愛い、冗談で口元に新しいのを持ってくとそれをじつと見て、食べ始めるので癒される。

結構長い時間店内で飲み食いしていると、ロキ様は伸びてしまうと、机に頬を付けて眠っている。その姿を見たヘステイア様が面白がって、スプーンで頬を突くのだが、行儀が悪いと俺がデコピンする。

「あうう〜ベル君はもう少し僕に優しくあるべきじゃ無いかなあ?」

「え? 厳しさが足りないんですね! 分かりました」

「うわああ〜嫌っ君の優しさが今身に染みて感じて

居る所だよ」

「本当に貴女の為に、生まれて来たかと思う子ね」

「ヘステイア様には、良い薬の様ですな」

「良薬は口に苦しですからね! 神様?」

「あはは、そっそうだね」

アイズさんが眠いのか、欠伸をしたと思ったら椅子を近付けて来ると、膝の上に頭を乗せて来たのは本気で驚いた。

そのまま気にせずにお酒を口に運ぶと、ヘファイストス様が大人ねと呟く、精神年齢的には37歳ぐらいだから仕方ないよね。

最終的には、会計の際も離れようとしなくて、黄昏の館まで送って行った。一緒に寝ると言い出してからは、リヴェリアさんが止めて来れ渋々ではあるが分かったと言い離れてくれた。

——翌日の朝

リリと約束したバベル前に向かって居た、すると目の前をアポロンファミリアのヒュアキントス・クリオと取り巻きが道を塞ぐ。

無視して避けて通ると、ヒュアキントスに肩を掴まれるが、それも無視して進もうとするが力を入れて止めて来たので元俳優らしく…。

「がっあああ!? かつ肩がああ」

大声で叫ぶと、周囲を巡回中のガネーシャファミリアの団員が駆け寄って来る。アポロンファミリアの奴らは走って逃げて行った。

ガネーシャファミリアには、絡まれそうで芝居をしたと言ったら、凶太い神経してると言われたが、それぐらいの方が冒険者向きですよと言う。

その後は、周囲を気にしてバベルに向かう。リリは既に来ていたので、一緒に黄昏の館へ向って行くのだが、門の前でリリは何でロキファミリアなのか疑問で聞いて来た。

「あつあの? ベル様のホームに向かうのでは無いんですか?」

「行くけど、その前にやらないと行けない事が、出てしまったんだ」

「そうですか…」

「すみません、ロキ様はいらっしゃいますか?」

「あつ…この前の「ベルです」ベル君ね、少し待っていてくれる? 伝えて来るわ」

「はい、お願いします」

数分程で戻って来ると、応接室に案内されて行くので付いて行く。ロキ様とリヴェリアさんにフィンさんがそこには居た。

(フィンさん今の反応は…)

「彼女は誰何だい?」

(やっぱり【小人族】^{バベルウム}女性は少ないから)

「彼女は、新しい家族ですよ」

「おつベルたんは手が早いなあ」

「人聞きが悪いですよロキ様」

「リリはリリルカ・アーデです」

「彼女は、何故と言う顔をして居る様だが？」

俺は説明して居ない事に気が付き、アポロンファミリアの事をぎっくり話すと、計算高いリリすら引いている。

「ほな、明日の宴はベルたんも参加やなあ」

「お願いしますねロキ様」

「任しいなこういう時は、ウチの十八番やでえ」

今日は、ロキファミリアに泊まる事にしたので、神様をラウルさんが連れて来てくれるらしい。日中は幹部メンバー2人以上と一緒に行動する。

明日の宴用に服を買いに、ロキ様と幹部女性陣とヘステイアフアマリアメンバーと成った。今回の宴はロキファミリアが主催らしいので、楽に参加を決められるのと、どうせ同盟の発表があるしとの事…。

リリは服を自分も買う事に驚いて居たが、リリもヘステイアフアマリアだよ？と言うと照れた様に笑って居たが、彼女は笑ってる方がいいなと思った。

——『神の宴』

俺は英国騎士の様な、コスプレに近い格好をさせられて居る…。何故か服を選ぶ際に、ロキ様とテイオナさんが悪ノリしてこうなった。

宴が始まって、ロキ様はメンバー紹介などをして行くくと、最後に同盟相手である俺達も紹介する。アポ

ロンは若干ではあるが眉間にシワを寄せる。

ここでロキ様が昨日の出来事を、急に歩いている所を肩に手をやって、力一杯握られたと言う。俺が痛って居ると逃げ出したと伝える。

「そつそんな事、私は報告を受けて無いぞ」

「それはアンタの問題や、んで悪気無いんやったら普通その場から逃げへんやろ？」

「「「確かにそうだな」」」

「そこで本人から提案があるそうや」

「初めまして、神：あほロン様：俺がその当事者で

急に肩を掴まれ、力を込めて来て叫んで居る所を放置されました」

「嘘では無い様だな…」

(嘘のない所しか、言っていないからな)

「俺は冒険者になって、まだ2週間ぐらいです。だがあんな一方的な行いは、許せない！そこでヘステイアファミリアは、あほロンファミリアに戦争遊戯を申し込むので、受けて来れますよね？」

「くっ馬鹿にするな!?私にあほロンでは無い、ア

ポロンだ！良いだろう、その代わりこちらが勝てば

お前：ベル・クラネルを貰う」

「良いですよ：俺はファミリア団長です。対価は俺が望む物全てを聞いて貰います!?良いですよね」

「良いだろう：戦い方は後日【神会】^{デナトウス}で決める」

「分かりました、もう取り消させませんから」

「こちらのセリフだ」

俺は笑いを堪えて居るが、後ろのフィンさんは完全にロキ様と笑ってる。リリは昨日強さを教えるとかなり驚いて居た。

その翌日には、緊急で【神会】が行われ、ロキ様が

司会らしく、悪意のあるスケジュールで進行していたのだとか。

・戦争遊戯について

(開催日は3日後・場所は古城・方法は攻城戦)

・報告事項

・命名式

※その時は前回の【神会】から3週間程で俺のみ

あほロンは、既に吐いた唾は飲めないと告げている為に、Lv7を相手にするなど自殺行為だ。誰も同情せずに、馬鹿だのあほロンだの言われたらしい。

——戦争遊戯

その日はやって来たのだが、Lv7がギルドで張り出されて居るので、最早見る必要も無いと言う街の雰囲気、俺は開始を告げられた瞬間に、魔法を使って5秒でヒュアキントスを気絶させた。

俺は、現地から【精霊の威厳】を使って、10分程であほロンの目の前に居た。追い続ける様な眼差しで見に来るが、俺の要求を口に出す。

1つ目

アポロンファミリアの全財産

※原作では罰則金・ソーマへの融資これが有った土地・建物別で資産5億

2つ目

アポロンファミリア団員改宗指示

ダフネ・ラウロス

カサンドラ・イリオン

※本人が嫌がった場合は拒否権を与えた。

(結局は大歓迎)

3つ目

アポロンファミリア即時解散

※その際に他者への嫌がらせ行為を個々に確認
行為が有った場合、脱退の理由に記載あり

(ヒュアキントス・他4名はギルドから罰則あり)

※罰金(1人700万) 罰則(5年間冒険者禁止)

4つ目

アポロンの天界送還orオラリオ追放

ファミリア団員に聴き取り調査にて強要入団が有った場合には、天界送還する。

(結果は天界送還)

無事に新しく本拠地を手に入れて、趣味の悪い装飾品の数々を撤去、改築には俺が個人的に追加した物が何箇所もある。

・外観が地味で印象に残り難い

俺が個人投資5000万を投入して、設計の時点で要望をかなり言って行った。

※白壁の様な壁に窓枠等の木材を木目が見える物に

・内装の色合いが薄暗い

ここも俺が個人で3500万投入した

※内装の壁や天井・床全て白で木材部分のみ木目調

・お風呂のこだわり

ここはファミリアの資金600万使用

※旅館の和をお風呂だけ取り入れ檜材を使う

・部屋数が多過ぎなので数カ所間取り変更

ここはファミリアと俺が1000万ずつ出資

※会議室・書庫・談話室・客室・応接室・ホール

全部屋を追加する。

・敷地内に鍛冶場を設置

俺は負担する500万

※鍛冶場の横に休憩スペース・倉庫付き

全てをゴブニユファミリアに依頼したら4日でやると言われて早さに驚く、恩恵の影響は建築面には大きいな。

改装工事中に、ファミリアのエンブレムを依頼して屋敷の門に取り付ける。俺はヘファイストス様にとってから、火精霊の護符が付いた特注ローブを依頼した。真っ黒なローブで、所々に金の糸で刺繍しているのと、エンブレムが背中に刺繍してある。

6話 新たな歩みと鍛冶師

——新ヘステイアファミリア

戦争遊戯の結果、ヘステイアファミリアにも団員が2名加わって、折角なので自己紹介からすることにしたのだ。

神ヘステイア

神様はこんな見た目だけど、大神ゼウスのお姉さんなのだ、クロノス（父）が自分の立場を失う事を恐れて、子供達を飲み込んだんだよ。

ヘステイア様は長女だった為に、1番に飲み込まれてしまった。まあ、それで姉弟の中で一番小さな見た目になってしまう。

そんな姉弟をクロノスの中から、大神ゼウスがクロノスのお腹で暴れて、みんなは生まれと逆の順番で吐き出されて行った。

そんな経緯からヘステイア様は、合法ロリになってしまったと言う訳なんだ。長女の自覚はあったために、ヘステイア様はクロノス内では、母親の様にみんなを守ってた。

これがヘステイア様を家の守り神である、かまど竈の神様として大神ゼウスは認めただ。そして神様は竈の神で炉の神でもあるんだよ。

リリルカ・アーデ

彼女は、ソーマファミリア所属の両親との間に生まれて来た。彼女の両親は神酒ソーマに心底心酔しきっていったんだって…。

両親はリリが居れば、もっと稼ぎが増えると思って

無理矢理に、リリをソーマ様の眷属に3歳頃からならしました。

彼女は冒険者になって親の為にも、一生懸命に稼いで来ていた。そんな矢先両親は無理な探索が原因でなのか、呆気なく死んでしまう。

当時5歳のリリは、ヤケになって居て遂には神酒にまで、手を出して居たのだ。そんな中で神酒欲しさに、懸命に探索を行うが、冒険者として小人族と言う身体的ハンデが、神酒との距離を遠くした。

8歳になる頃には、神酒の酔いも覚めて居て、それでも生きて行かなければならない。ここで彼女は冒険者である事を辞め、サポーターへと転身した。

彼女は自身のハンデに嘆き、それがスキルとなつてアーテル・アシスト【縁下力持】を発現させて居た。リリには小さな身体故に、大人達と渡り合う為の賢さを手に入れる。

昔は両親に搾取され、今度は冒険者達に搾取されて行く彼女。己が不遇から幻想を抱いた「シンダー・エラー」と言う変身魔法…。

それからの彼女は、搾取する冒険者を騙して盗みも働いていた。擦り切れる心に疲れ果て、死んでしまつても思つて居たら…。

「ベル様と出会ったんです」

ダフネ・ラウロス

彼女は俺の世界の神話にも、登場する人物なんだよね。神アポロンは大蛇を討伐した帰り、とある神の小さな弓を馬鹿にした。

それでその神は、アポロンが帰路の途中で偶然に出会った彼女に、拒み続ける矢をアポロンには、愛し続ける矢を射つたんだ。

彼女はアポロンから必死に逃げ、遂には疲れ果てて

しまい追い付かれる。彼女は捕まる寸前に父に願ったのだ、助けて下さいと：

そんな彼女の想いを不憫に思い、父は彼女を月桂樹へと変えてしまう。そうこれがダフネの二つ名でもある【月桂の遁走者】である。

カサンドラ・イリオン

彼女もまた俺の世界の神話に、登場して居る人物である。彼女はトロイの王の姪だったのだが、美人だった為にアポロンから求婚される。

拒んで居た彼女に、アポロンは『予言の能力』を与えると言い受け入れた。だがそんな彼女は自分がアポロンに、ボロ雑巾の様に捨てられる運命を予言。

彼女もそれが怖くて、アポロンの元から逃げ出したのだった。そこでアポロンは彼女に『予言を信じて貰えない呪い』を掛けた。

その神話に沿って、カサンドラの予知夢はアポロンやダフネ達に信じて貰え無かった。彼女の予知夢の内容が危険を報せるモノ。

そんな彼女に付いた二つ名【悲観者】と言う。本来ならもてはやされる能力だが、呪縛によって信用される事の無いモノである。

と言う心のナレーションを呟くと、改築中のホームでは無く、間借りの宿屋のベットを起き上がる事にしたのだった。

今日はみんなの装備と、役割に合った物を買に行く約束だ。可哀想な神様はバイトであるが、俺達はヘファイストスファミリアのお店に来て居る。

「リリには装備が必要無いのでは？」

「ん？リリって一定以上なら、力に補正が入るんだよね…。それって凄く重くても、一定の重さを感じるって事じゃ無いかな？」

「——ッ!?言われて見たらそうですね」

「と言うわけで荷物は、みんなに分散して持てる様に考えてるよ。カサンドラは、支援がメインだから少し多めになるけど…ごめん」

「いえ…私はそれぐらいしか」

「言い忘れてたけど、カサンドラの夢は本当に予知夢だからね。悲観しなくて良いよ、これからは君の言葉を信じるから、夢の話を沢山聞かせて欲しい」

「——ッ!?信じてくれるの…」

「ああ、勿論だよこれから宜しくね」

「嬉しい…です／＼」

俺達一行は、二等級装備を求めてヘファイストス様に会いに行った。鍛冶師の紹介をして貰う為で、流石にヘファイストス様が打ってくれないだろう。

「こんにちわ椿さん、ヘファイストス様はいらっしゃいますか？」

「主神殿なら、もう直ぐ戻って来られるだろう」

「だったら、この店で一番重い物有ります？」

「重い物か…そうだなこれはどうである？」

渡されたのは、一等級の戦斧であったが俺でも重いやと言う代物。リリに何も言わずに渡して見ると、予想通り片手で持ち上げて居る。

「何と、それを片手で持つとはな!?ガレスの戦斧だと言うのには」

「リリこれで分かったかな？君には重くて扱い易い

「武器が良いと思うよ」

「正直、リリ自身が驚いています」

「椿さん彼女の武器選びを手伝って貰えませんか？」

「手前で良ければ、一向に構わんよ」

「おっお願いします」

その後は、直ぐにヘファイストス様が戻って来られたので、【兎鎧】^{びよん吉}の製作者ヴェルフ・クロツゾを紹介して貰うのと、ダフネの細剣と軽装を依頼出来る鍛冶師を紹介して貰う事に…

カサンドラに関しては、ミスリルと深層の『デフォルメス・スパイダーの硬糸』を混ぜて織られたワンピースの様な戦闘衣を購入。

30分程お店の中を見て回ると、リリの武器選びが終わったのか、椿さんは楽しそうでリリは疲れた顔で戻って来たのだ。

「この者の装備は、特殊な物で無いと駄目だろう」

「そうですか…？どなたかいらっしやいますか？」

「手前がこの者の、専属鍛冶師に成ろう」

「え？」

「良いんですか？是非お願いしますね」

「ちよっ!?!ベル様っ」

「気にしなくいい！椿さん武器の鍛練にも付き合っ

貰う事はできませんか？」

「時間がある時で良いなら構わんよ」

「ありがとうございます」

「ベル様!?!おっお願いします」

ヘファイストス様が、ヴェルフと女性でハーフトワーフであろう、椿さんのミニバージョンの様な人が一緒にやって来た。

話を聞く限りでは、椿さんの従姉妹で桜・コルブラ

ンドさんと言うそうだ。一緒に来たヴェルフはすこぶる機嫌が悪い。

「貴方が【兎鎧】の製作者ですか？」

「ああ！そうだが…」

「そうですか…帰って良いですよ」

「…「なっ!?!」」

「貴方が何故、そんなに不機嫌かは想像付きませんが、れども、その態度は初対面で失礼ですよね」

「そうね…ヴェルフ貴方が悪いわ」

「…:…すまない」

「理由は、クロッゾの魔剣ですよ？俺からしたら数回で折れると分かって、持つ何てなまくらを装備するよりタチが悪いです…装備者に負担を強いる魔剣を、作れば良いのって前から思ってますし」

「!?どっとう言う意味だ?」

「魔剣は内包する力を、消費するから折れると俺は思いますよ…なら魔力を使用者から吸って放てば良いのでは?属性剣になっちゃいますね」

「ここに天恵を得たり…おい感謝する!」

「感謝するって言われても困りますよ?考えのほんの一部ですから、気にしないで下さい」

「なっ!?!まだ在るのかよ」

ヴェルフは店に来た時とは、雲泥の差が在るほどに鍛冶魂に火を灯し、俺の因果論を夢中で聞いて来るのだったが、ダフネが痺れを切らせ怒り出す。

ある程度武器と防具を依頼して、今日はまだ予定がある為に、次に向かった。【魔女の隠れ家】と言うリヴェリアさん一推しのお店だ。

入店して見ると、隠れ家ぽいと思ったのは店員さん

にも原因がある。^{ダークエルフ}【黒妖精】で露出が少ない衣装を纏い、濃い色のベールを頭に掛けて居る。

カサンドラ向きの杖を見つけた、水属性の魔法石が付いていて、先には両側に爪と先端に刃…。魔女のコスプレに持ってこいだな。

それ以外にも、魔導具を皆に買う。カサンドラに髪留めのバレッタ・ダフネにピアス・リリにチョーカーをプレゼントした。

そのお店の店員さんに、珍しい魔導具を付けてるようだと指摘される。俺の髪留めはどうやら、かなり高価な神性を抑える魔導具だとか。

全て購入してから、隣にある戦闘用衣服店に向かう予定にした。全員の戦闘服バトルドレスを買わないと、普段着で戦闘する事になる。

ここは全てオーダーメイドのお店で、早い時とかには半日で仕上げてくれるそうだ。今回は俺のも依頼するつもりで居る。

「生地は、色だけは選んでいいから…A仕様で…」

「はい（うん）」

「これなんか良くない？」

「ダフネちゃん…綺麗系が似合うね」

「確かに、羨ましいですね」

「リリ何て可愛いのが似合うんじゃない？」

「1番ずるいのはカサンドラ様ですが…どっちも」

全員が色を選んで、サンプルにA仕様の戦闘服を着たマネキンを見てデザインを選ぶ。ここに実は落とし穴が、存在した何て考えもなかった。

【武具類】

——リリルカ——

特殊設計武器（作：椿・コルブランド）

5000万

プレートアーマー

1000万

——ダフネ——

細剣（作：桜・コルブランド）

2800万

パーツ鎧「胸・肩・腕・脚・腰」

1200万

——カサンドラ——

狼魔の杖（作：無銘）

3000万

デフォルメス紅衣（ワンピース型下衣）

600万

——ベル——

※材料持込

ハーフ・プレートアーマー（作：ヴェルフ）

500万

——合計——

1億4100万

【戦闘服】

A級戦闘服

4名分：1000万（1人4着）

【魔導具】

リリ：50万

ダフネ：30万

カサンドラ：60万

計：140万

——本日の買物——

総合計：1億5240万

——所持金——

3億1124万（ヴァリス）

この数日で、2億5000万程使っている…。異常だなと思うのは、まだ金銭感覚大丈夫なのか？駄目な気がするな。

昼食前に【万神殿】に向かって【ヴィーヴルの涙】のオークション結果を確認に行かないとな。所持金も多過ぎなので幾らか預けて行こう。みんなでギルドに着くと、ロイマンを呼ぶと相変わらずで嫌な顔をする。オークションの売上金額を聞きに来たと伝えた。

——『ヴィーヴルの涙』——

《オークション売上表》

『ヴィーヴルの涙』1点

21億4800万〔A〕

ギルド手数料（3%）

6444万〔B〕

当日先払い（3割）

5億6954万〔C〕

※最低実績17億

収支合計（A―《B+C》）

15億1402万

※預金額と同じ

今回の売値は高かったんでかね。預金に手持ちから2億入れて行くかな…。お昼はどこで食べるかを話し合うと、前は各自だったからどうしたらと言われたので【豊饒の女主人】に向かった。

ご飯に行くお店を増やそうかな、このままだと毎回ここに来るだろうな。リユースさんに勧誘をして行きたいがミアさんに目を付けられたくない。少しだけ話し掛けて見るか。

7話 ヘルメスとの邂逅 オラリオ変革の兆し

【豊饒の女主人】に着くとアーニヤさんが出迎えてくれ、テーブル席に案内された、昼を少し過ぎていたのでお客さんは余り居ないようだ。

「お肉と魚どっちがいい？野菜も有るだろうけど」

「リリはお肉でお願いします」

「ウチも一緒で」

「私は、魚が良いです」

「飲み物は？お酒？」

「いえ（いや）」

「すみませくん！」

向かって来たのはリユーさんだ、少しだけ機嫌が悪いかな？「こんにちわ」と言うと浅く一礼をしてくれてから、注文に入った。

「以上で宜しいでしょうか？」

「注文は良いです。ファミリアの件どうですか？」

「その件ですが、もう直ぐ休憩ですのでその時でも

良いでしょうか？」

「ありがとうございます」

俺は考えてくれてる事に礼を言う、リユーさんは会釈をすると厨房に入って行った。3人がどう言う事って言う顔をして見て来る。

「リユーさんは知ってますか？」

「はい（ええ）」

「それは冒険者の頃の二つ名ですか？」

「え（は）？」

「リリは知ってるんですね」

「リリはそう言った内容に明るい方でしたし」

「ここは訳ありの人ばかりですしね」

【疾風】【黒拳】【黒猫】ですね」

「ええ!？」

「静かにお願いしますね…リユーさんは非常に真面

目な方です。真正面から殲滅、ブラック入りです」

「では、冒険者に成れないのでは？」

「俺がギルドを動かし、名誉を回復中です」

「何者ですか（なの）」

「ベル様らしいですね」

俺達が話し込んでいると、料理を持ってリユーさんとシルさんが来た。俺はシルさんに自己紹介をして居なかつたのである事に…。

「シルさん初めまして、ヘスティアファミリア団長

ベル・クラネルです。今後もちちらを頻繁に使わせて頂きますので、よろしくお願いします」

「こちらこそ宜しくお願いします」

【豊饒の女主人】で女神の様な方だと噂で聞きま

したので、直ぐに分かりました」

「可愛い方なのに、お上手ですね」

「男性だと分かる何て初めてです…輝きですか」

「そうですね見えますよ」

「ありがとうございます」

俺達は一先ず食事をしようと言い、皆食事に手を付け始めた。そこそこ食べ終わってから、俺は話しを切り出した。

「リユーさんは、冒険者をしたく無いですか？」

「いえ、そうでは無いです…」

「アストレア様ですか？」

「…はい、お会いするのが…」

「怖くて当然ですよ、相手がどの様に思ってるかなんて、前もって知りようが無いですから」

「はい、拒絶されたらと、思ってしまう」

「無いと断言切れませんが、その時は俺が居ます

し、冒険者になってもシルさん達は居ますよ」

「…ありがとうございます…ます／＼」

「リユーはどうしたい？」

「シル…：クラネルさんと冒険者をしたい…です」

「それはもう答えじゃない？」

「…はい」

「シルさんミアさんに話し出来ますか？」

「はい、お待ちください」

その後は、リユーさんの今後について話をさせてもらったり、アストレア様が見つかったら、連絡を入れると約束する。

リユーさんと3人は、自己紹介をやつと出来て良かったな、これからもヘステイアファミリアをもつと成長させて、守れる様に頑張らないとな。

【豊饒の女主人】を出た後は、ヘルメス様に会いに行く事にした。ファミリア本拠地に向かって歩いて行くと、目の前に羽帽子の青年が歩いて来る。

「ヘルメス様ですか？」

「へ？ああ、そうだよ俺がヘルメスだが」

良く見るとヘルメス様の後ろには、ヘルメスファミリア団長アスフィ・アル・アンドロメダさんも一緒に居たようだ。

「急にすみません、丁度伺いに向つてまして」

「俺に用が有ったのかい？」

「はい！初めましてヘルメス様、俺はヘステイアフファミリア団長ベル・クラネルです。祖父がいつもお世話になってます、この場合叔父さんとお呼びした方が？」

「やはり君は知って居たんだね、彼からは可能性があるとは聞いて居たが、本当だったとは思わなかつ

たよ……。そうだ要件って何かな？」

「【疾風】リ्यू・リオンにアストレア様を会わせてあげたい」

「いいよ、オラリオから出る手配をしたのは、俺だから場所も分かってるしね……。対価は」

「情報を差し上げるか、2000万ヴァリスでは？」

「アスフィどっちが「お金」早!?じゃじゃあお金
でお願いするよ」

「分かりました。アストレア様にその気があれば一

緒に住まないかを、聞いて下さい。主神がヘステイア様ですから可能ならば、こちらは嬉しいですから

ね……。その場合は情報も差し上げます」

「それは是非、伝えて見るとするよ」

「お願いします。今後何かある際はヘステイア様では無く、俺にお願いしますね」

「ヘステイアはそう言った事に不向きだからね」

俺はその場でお金を取り出して手渡す、それを見ると2人は持ち歩いている事に、驚いて居る様子だったので一応偶然、持って居たと伝えた。

丁度良いので、アスフィさんに【漆黒兜】ハデス・ヘッドを売って

欲しいと頼むと「どこでそれを」と言われて知って居たからですよと伝えた。

「彼は、本当の事を言っているよ」

「追跡はしないで欲しい、貴方を危険に晒したくは無いですから」

「アスフィが決めて良いよ」

「では……2500万でお売りします」

「ありがとう、いつ取りに行ったら良いですか?」

「直ぐに必要でしたら、取って来ます」

「出来たらオラリオの為にもお願いします」

「凄く気になる言い回しをするね、その情報が気に

なってしまうよ」

「ウラノスに聞いて下されば、予想は付きますよ」

「そうかではそうさせて貰うよ」

「大きなお世話だろうけど、イシユタルとの取引は

辞めて置いた方がいいですよ」

「どう言う意味か、教えてはくれないのかい？」

「良いですが、この様な道端でする話しでわ…」

「確かにそうだね。今からウラノスに会いに行くが

一緒に行くかい？」

「ではご一緒しますね」

俺達はギルドに向かう事になったのだが、3人にはただ待つだけでは申し訳ないので、多めにお金を渡して、普段着を買って来ると良いと伝えた。

ヘルメス様と俺は、アスフィさんが戻って来るのをその場で待つと、数分で戻って来る。お金を渡すとヘルメス様が幾ら持ち歩いてるのかを聞いて来たので、1億ちよつとと言うとアスフィさんは目がギラギラしていて、2人で引いていた。

最近是这样言った動きが、凄く多い気がするが1人で出来る事には、必ず限界がやって来るだろうから頑張つて動くしかないかな。

「おっいロイマンさ〜ん」

「君は随分利用しているのかい？慣れを感じるよ」

「そうですね？この人が硬いから和ませ様と思っ

ましてね。結果がこうやって皆の上司を気安く呼び

付ける様を、見せ付けてます」

「成る程ね、今度から真似して見ようかな？」

「アスフィさんに怒られても、知りませんよ？」

俺達は祈祷の間に案内されると、ロイマンさんは下がって行く。アスファイさんは後方に一步下がって待機する様に控える。

「ウラノス久しぶりかな？今日は偶然彼と会ってね

一緒に来たと言う事さ」

「何じやお前達は知り合いだったのかの？」

「今日自己紹介した仲ですよ？」

「そうだねつい先程の話しだけどね…。ところで呼

び出した理由はベル君ですか？」

「そうじゃな、この者の情報は我々の為に成る物が

多い、【怪物祭】に関しても提案されての」

「どの様な提案ですか？」

「【異端児^{ゼノス}】を出させる事じゃよ」

「正気ですか？」

「俺が思っ居るのは、調教を見せる事は逆効果だ

と思いますよ。強いモンスターを調教する事で、冒

険者が居たら安心だと思わせる。

その反面で、モンスターは怖いだから冒険者は必要

と言う。モンスターに慣れるのでは無く、冒険者の

株を上げてモンスターの恐怖を植えて居る」

「では、どうやって彼等を【怪物祭】に出すつもり

で居るのかな？」

「簡単ですよ、可愛いとか綺麗とかが強いものを厳

選する。先ずは知性が在る事を民衆に理解させるべ

きです。その段階を見せる事で交流を持つ、そうす

る事が出来たら彼等は、新たな種として認知出来る

そう思います」

「確かに、その方が現実的だな…」

「当然地上に上げたゼノスは、地上で暮らす事に成

るから、闇派閥の懸念をしないとならない。そこで

都市最大派閥の面々には、協力して貰わないと警備

に關しても、今後の流れを考えても必要だ」

「その必要性は、大いにあるじやろう」

「そうだね…。誰が説得に？」

「俺が行きますよ、ヘルメス様一緒に今から行きましようか？」

「え？今からかい!？」

「怪物祭」まで時間が余り無いですよ？」

「確かにそうだけど…君はフレイア様に会って平気なのかい？」

「魅了なら効きませんよ！安心して下さい」

その足でバベルの最上階へ、ヘルメス様達と向かう事になった。ここは新しい役を演じよう彼女の周りには居ない男性役を…。

最上階に着くと、オツタルさんが案内してくれるらしく、前を歩くのだがデカイ兎に角デカイ!?ゴリマツチヨってこれだな。

最後の扉を開ける前に、立ち止まってノックをするオツタルさんだが、優しくノックが凄くシユールな絵図らだが口にはしない。

「どうぞ、通して頂戴」

「…どうぞ」

「ありがとうございます」ペコ

俺が軽くお辞儀をするが、何の反応もしてはくれないのが残念だ。そこには銀髪的美（人だが）魔（性の）女がそこには居た。アスファイさんに腰の刀を預けてから前に進む。

「ヘルメスと珍しいお客様ね…」

「お初にお目に掛かります。ヘステイアファミリア

団長ベル・クラネルと申します。今後は何かとお会いする機会も有ります、以後お見知り置き下さい」

俺はゆつくり前に出て、フレイア様に近付いて行くのだが、オツタルさんが立ちはだかるのだが、フレイア様に止められる。

手を取って手の甲にキスをすると、目をしっかり見つめて最高の笑顔で笑い掛ける。フレイア様は俺の姿に満足したのか上機嫌だ。

「ヘステイアが羨ましいわ…」

「光栄ですね。今日は今後オラリオで世界を揺るがす事に、挑戦して行きたいのですが、フレイア様いえフレイアさんには、先ず友達に成って頂きたいと思つてます。当然友達とは掛け値無く対等な関係ですからね」

「くつくく…ぷつ…くく…ふう」

「ふっフレイア様」

「珍しいね、貴女がそこまで笑う何て」

「可笑しいでしょ…友達に成って欲しいだなんて」

「どうですか？下界に降りた甲斐があつたかな？」

「ええ、是非とも貴方いえベルと、友達に成らせて

頂くわね」

「それとは別件だけど、これからの事でどうしても

オラリオ最大派閥の、フレイアファミリアに協力し

て欲しい事が有るんですよ」

「良いわよ」

「内容は聞かないんですね、流石です」

「オラリオ最大派閥なら、もう1箇所有るでしょ」

「ええ、お察しの通りです」

「それにベルが、面白い事してくれそうだわ」

「お眼鏡に叶う様、精進しますよ」

「ええ、楽しみにしてるわ」

「良かったら今日は、親睦会を兼ねて【豊饒の女主人】で食事しませんか」

「そうしたいのだけど…」

俺は、自分の髪に付けている髪留めを取りフレイアさんに、今日だけですがお貸しします。そう言うとお微笑んで借りるわねと返して来た。

バベルを降りて行く際に、ヘルメス様には君は精霊かと聞かれて、半分ですかねと答えた。ヘルメス様達にも親睦会に参加して貰う様に言い、ガネーシヤ様にも伝えるのをお願いした。

俺はバベルを出ると【豊饒の女主人】に団体予約を入れてから、黄昏の館に向かう。途中でラウルさんに会って一緒に向かう。

「ラウルさんは、アナキティさんの事好きですか？」

「ええっ!?!なんすか急に／＼」

「どうなんです〜」

「彼女は…綺麗だし相手にされないっすよ」

「そうは思わないですよ?きつと好きですって」

「そっそうっすかね／＼いやあくでも」

「俺がこっそり聞いといてあげましようか?」

「いや!?!俺が頼んだ見たいじゃ無いっすか」

「間違いでは無いですけどね…。俺の予想が正解だ

ったら即告白ですからね!」

「ええ!?!何言ってるんですか?」

「おおっ♪アナキティさん発見」

「ちよちよいと待つて下さいっす!」

俺はLv7の脚力で駆け抜けて、アナキティさんに質問を飛ばす。

「アナキティさんラウルさんの事好きですか?」

「え!?!／＼どっどっ言う意味なの／＼」

「異性として好きかですよ」

「そっその…」

「好きなら告白して貰う方法ありますよ?」

「えっ…本当?」

「好きなんですか?」

「……はい」

「だそうですよラウルさん」

「えっえっええええええ／＼」

「ラウルさん約束」

俺は流石に邪魔したく無いので、親指立ててその場を離れるて中に勝手に入る。丁度フィンさんが歩いて居て手を振ると、額に手を当て溜息を吐く。

「どこから突っ込もうか悩んでしまうよ」

「そうですか?今から時間良いですか?」

「何か話しかい?」

「はい、幹部の方々は居られますか?」

急に来たので、アイズとヒリユテ姉妹は不在と言う事らしく、アイズの説明を上手くしないと行けないんだよな。ロキ達は執務室に集まってくれて、ではこれから話し始めようと言う時…。

「ロキ…ステータス更新…して」

「……」

「ロキ居たあ?あれみんなどうしたの?」

俺達は先にどうぞと言い席を外すと、リヴェリアさんが謝罪して来たが特に気にしてないと言う。二度手間が無くなったと思うしな。

「んで、急に来たんは何かしら有ったんやろ?」

「オラリオをと言うよりかは、世界を揺るがす事と

言った方が良いんだろうかな」

「何や勿体ぶらんとはよ言いや」

「先に質問良いですか？指名するので答えて欲しいのですが、そこで段階を経て話します」

「「ああ（ええで）（ええ）（うん）（はい）」」

「では先ず、貴方は4000年前に生きて居るとしましてようか、その頃はまだ完全なヒューマン以外は亜人と呼んで居た。そんな時にAのヒューマンが誰かに殺された、そこには…

B ナイフを持ったヒューマン

※ナイフには血が付いて居る

C 丸腰の猫人

※猫人なので爪が有る

D 松明を持ったモンスター

※モンスターはリザードマン

誰を疑いますか？理由もお願いします。ではフィンさんお願いします」

「単純にBを1番疑うかな、理由は血が他には付いた者が居ない」

「そうですね、見た目でも種族でも無く事実がそこに有るから分かり易い。では次ですね、今度は冒険者には難しい質問ですね。

貴方は今ダンジョンで探索をして居ます、目の前には3組の集団が戦闘をして居ます。

A 仮面をして、全てを白い装束で覆う怪しい集団

※人語を話すモンスターを捕まえ様として居る

B どちらにも攻撃するモンスター

※とても獯猛で野生的

C 怪我した仲間を心配するモンスター

※人語を話して、身を守って居ます

貴方はどこを助けますか？又は事の成り行きを傍観

してしまいますか？ではレフイーヤさんにお願いで
きますか？」

「はっはい…Bは倒して…どちらにも人語を話すな
ら戦闘を辞めさせて話し合おう」

「凄い！模範解答ですね、正に知性がある者ですよ

ね？もうフィンさん辺りは、分かってそうですが続
けて良いですか？次で最後です。

これはアイズさんに質問です…。

ある日闇派閥にて、仲間を攫われた人語を話すモン
スター達は、仲間を助ける為にその者達を攻撃して
居ます。そんな中貴方は闇派閥と知らないとします
が、どちらを助けますか？」

「…分からない…どうしたら良いか」

「ではアイズさん、目を閉じて聞いて下さいね…仲

間を返せ！どうして話し合えるのにそんな事をする

と一方は言ってます。もう一方は黙れ怪物風情バケモノが人

の真似すんじゃないやねえ、俺達人間の為に捕まれやと言
って居ます…どちらを助けたいですか？」

「…仲間を守ってる…方」

「そうですね、見た目では無く、知性でも無く中身

が大切になって来ます。人は知性が存在するが、互
いに殺し合う事など普通に起きてる。

もう気付いてるでしょうが、モンスターの中で新し
い種が存在する。言葉を話せる者が多く、知性は勿
論ある上に出来たら共存したい、そう願ってるんで
すよ…。

その願い叶うと思いますか？フィンさんはどう思い

ますか？」

「難しいだろう…な、無理とは言わないけれど」

「でしようね、でも俺はそれを可能にするビジョン

は見えてますよ。【怪物祭】モンスターフィリアは実は共存の為に行わ

れて居たんですよ、俺から見たら悪手でしたがお祭りは良い考えだ。

元々は、ギルドが15年程前に発見したらしく、その間は対話したり生きてく支援をしてる。協力者はガネーシャ・ヘルメスです。

そこで俺が新たな提案を、持ち掛けたのが今回の口キファミアリアの皆にも伝える切っ掛けになった」

「えらい大ごとやなあ〜」

「そうだね…冒険者はやり難いね」

「簡単ですよ襲って来るなら倒せば良い、ただそれだけです。闇派閥は人間ですが、倒さなくてはなら無いのは何故ですか？リヴェリアさん」

「奴らは、人を襲い又は人を狂わせる、人道的でない事を平気で行う。狂人の集まりだからだ」

「本当の意味で言うなら、知性が存在するにも関わらず、同族を平気で殺して狂人と言うべき行いをし
て居る、そんな人間をモンスターと言うべきだ。

ダンジョンで人を襲って来るのは、動物と言っても過言では無い。そこで今回の催しは調教を辞めて言葉を話す【異端児】と呼んでる彼等を出す。

実は闇派閥は彼等を、特に見た目が綺麗な者などを狙って集め。オラリオの外で貴族に売って居るんですよ。ここで警備や周知を怠慢すれば、守る側と知らない者で争ってしまう可能性がある。

因みに、フレリアファミリアは協力してくれますか

らね。ロキファミアリアさんは協力して頂けます?」

俺の長い話しが終わると、皆で話し始めたので出された紅茶を飲みながら、少し心が揺れ動くアイズさんの頭を撫でて呟いた。

「アイズさんは難しく考えなくていい、襲つて来るモンスターは敵で大丈夫です。俺がその悩みをどうにか解決しますよ」

「…うん…ありがと／＼」

「いいえ、言葉を話すゼノスを早く地上に上げてしまえば、新たなゼノス以外は全部敵ですから」

俺がアイズをあやして居ると、レフィーヤさんがこちらを睨んで来るので、笑顔で何ですかと聞く。すると少し頬を染めて慌てて居る。どうやら決まった様なので、返事を聞こう。

「ウチらも協力したるわ」

「宜しくお願いします」

「ああ、こちらこそ宜しく頼むよ」

「今日の7時親睦会が有りますので、幹部の方々は

参加お願いしますね」

「ああ、参加させて貰うよ」

俺は今後について話をしてから、黄昏の館を出て行くのだが、アイズさんが付いて来るので、それなら他にも付いて来ませんかと聞くと、レフィーヤさんとリヴェリアさんにヒリユテ姉妹が付いて来る事になった。

ホームの完成を見に行くので、皆で新しく成ったヘステイアファミリア本拠地に向かう。途中で神様のバイトが終わる時間が、そろそろなのではと思いき

って残りのじやが丸くんを全て買って帰った。

8話 喜怒哀楽

みんなで一緒に、ヘステイアファミリアの新しいホームに着いたのだが、見違える程の様変わりだよな
と思ってしまう。

白い壁に、窓などの木の部分が濃いめの茶色で落ち着きを出してお洒落なカフェだな。他の女性陣は興奮気味に感動してる。

「初めて見る建築様式だな？」

「そうですね、この世界に無い技術を伝えたので」

「凄いい〜お洒落だね」

「はい！羨ましいです、ここに住めるのが」

「個人で9500万出したからね」

「9500万!?!」

「貴方お金持ちなの？」

「オラリオに来てからですよ？貯金は15億でノームの貸金庫に、まだ色々あるみたいですから」

「お前1人で、上位ファミリア以上の資産だな」

「そうなんですか？そちらはどれ位です？」

「12億前後がうちの資産の平均だな…」

「そうですか？確かにあほロンは5億でしたしね」

「べつベル君そんなに持ってたのかい？」

「まあまあ、いいじゃ無いですか！」

「そっそうだね、でわ中に入ろうか」

扉を開けると、落ち着きのある雑貨屋だなと設計に口を挟んで置いて思う。紙の上と現物の違いは大きいだろうなあ…。

「中也凄くお洒落だな」

「ここに住みたいなあ〜」

「交換して欲しいわね」

「ですです」

「私……改宗する」

「だっ駄目だよおく私も迷ってるのにい」

「おいお前達!？」

「ぐぬぬっアイズさんが行くなら……でも……」

「こら! レフィーヤまで何を言ってる」

「それ以上副団長さんを困らせない」

「……」

「お前達本気じゃ無いだろうな」

「あはは、僕は歓迎だからね」

その後も設備や部屋を見る度に、同じ様なやり取りを繰り返して居る。最後はリヴェリアさんがなら私も行こうなど言い出しテイオネさんに止められる。

みんなで食堂に行くと、まだ時間的に余裕なので寛いで居ると、団員達が帰って来たので振り返って見ると、買い物した荷物で両手が塞がっていた。

「楽しんだんだね」

「楽しかった(です)」

「なら良かった、お釣りは残った？」

「流石に残りますよ!?! 服買いに行行って来いって言

われて、100万は渡し過ぎです自重して下さい」

「でも少ないお金で悩むより、良かったでしょ？」

「はい、リリはこんなに買い物したの初めてです」

「「ありがとうございます)」

「いえいえ、残りはヘステイア様に渡してあげてく

れる? ヘステイア様も残りで、普段着や寝間着なんかを買って下さい。いつも心配してくれてる事への感謝ですよ」

「べっベルくん!」

「暖かいファミリアだな」

「なんか見てほっこりするよお」

「家族って感じね」

「…改宗、する」

「アイズさん本当に来ます?」

「うん…ロキに言う」

「こつこつ誘惑するな」

「そうだへステイア様達、今日は外食だよ」

「…へ?うん(はい)」

アイズさんは本気で言うだろうな、改宗したいって事を、どんな反応するんだろうかな。そろそろ出ようかな?そう言えばラウルさんどうなったんだ…。

———【豊饒の女主人】

最近思うが精神年齢が、身体に引っ張られてる気がするんだよなあ。まあ若いって事で良いか。お店に着くと、リユースさんだったので挨拶してから案内をして貰った。

こうして見ると凄いメンバーだよな…。そう思ってるのとミアさんに手招きされて行く。周囲のみんな俺の方を見るが気にしない。

「こんばんわ、急に予約してすみません」

「それはもう良いよ、何だいあの面子は営業妨害しに来たのかい?普通に上位ファミリアが勢ぞろいしてりや嫌でも萎縮するんだよ」

「すみません、今日はこれで許して下さい。お釣りは良いですが、フレイア様にシルさんを付けて下さいねえ」

俺は背負ってた鞆から、500万ヴァリスを出して謝ったら、溜息混じりで今度は貸切しろと言われて頷いた。俺は席に素早く戻って音頭をガネーシャ様に

以来する。

「ガネーシャ様、自己紹介以外で音頭をお願いしますねえくしたら仮面外しますよ〜」

「うっがっ……」「どうぞ」私がガネーシャだ!？」

「二」「カンパーイ」「二」

「そうだフレイアさん!さんも外して良いです?」

「良いわよベル♪」

「二」フレイアさん?」「二」

「うん、今日フレイアと友達になっただよ」

「そうね、急にヘルメスと来て本題より先にね」

「何やその遊びに来たよ見たいなノリわ」

「ベル君……この集まりって何だい?」

「ヘステイアファミアには、言っただけですわね」

「あはははは!あかんわあ〜灯台元暗しやなあ」

「帰って説明しますね〜」

「こう言うの、本当に久し振りにしたわ」

「今度から偶にしましょう〜オツタルさんだっけい

つもあんな堅物ですって、顔になったのはきつとフ

レイアが引き籠もるからだよ?。」

「どうなのオツタル?」

「いえそんな事は無いかと」

「そこ本人に聞いてどうするんですか?」

「そう言うのは周りが判断するんですよ」

「そうなのね……イエスマンが多くて知らないのよ」

「こう言うのは、ヘステイア様に聞きましょう」

「そうね、彼女なら本音を言ってくれるわね」

今日は結局店が閉まるまで居て、リユースさんと一緒に皿洗いをした。シルさんもフレイアと一緒に楽しかった様で良かった。フレイアは帰った後に使いを出して、髪留めのお礼だと言って【魔導書】を一緒

に手渡された。

——【^{デア・セイント}戦場の聖女】

翌日の朝

ヘステイア様が二日酔いで、仕方無いから薬を買いに行く【青の薬舗】が珍しく、時間をずらして営業すると張り紙がされてるので、仕方ないがディアンケヒトに向かう。

お店は【青の薬舗】と違い、凄く綺麗な店舗だなとミア八様に失礼な事を考えながら、商品を見て行く事にしたが商品が多い。

「いらっしやいませ、何か御入用ですか？」

「二日酔いに効くようなの有りますか？」

「こちらが宜しいかと思えますよ」

「綺麗な上に仕事が出来る何て凄いですね！」

「え!?!／／」

「ん? 普段から言われ慣れてそうですが意外な反応

です、そう言った面は可愛いですね…。ディアンケ

ヒト様が羨ましいですよ」

「あの…余り揶揄わないで下さい…／／」

「揶揄う? 本当の事言っただけですよ」

「——ツきゅ／／」

「うわあっ!?!」

やってしまった…アミッド・テアサナーレは意外と恥ずかしがり屋なのかな。彼女を抱き上げてどうしたものかを悩む、椅子を3つ並べて彼女を乗せると頭を俺の膝上に預ける。

俺は目が覚めるまで待つ事にして、待ってる間暇だからアミッドさんの頭を撫でながら、商品を見回して見ると品揃えもだが気配りを店内全てに感じる。

20分が経過…40分が経過…1時間？今撫でてる時に指が耳に触れてピクピク動いた様な。寝たふりかな違うよね？

「起きないと、キスしますけど良いですよね」

明らかに動揺してるけど起きないのはキスして欲しいのかなあ？恥ずかしがり屋の癖に意外と大胆な子なのかな…。俺は人差し指と中指を合わせて、アミツドさんの唇に優しく触れてchuつと言う。

「んツ」

「起きないと舌入れちゃいますよ」

「さっ流石に…ふぁファーストキスでそれは…困り

ますと言うか…店番中ですし…」

俺はデコピンをして、いつから起きてるかを問い詰めると、30分前だったらしいが…。気絶したのかと思ったら、膝枕されて頭撫でられてるのが、最近の心の際にストンと入り込んだらしい。

弁明の様に、普段から誰でも良いとかそう言う事では無いと言われた。何の事だ？そうだ二日酔いの薬を忘れてた…。

「あつ!?アミツドさん?」

「はっはひ／＼」

「二日酔いに効く薬をお願いしますー！神様を忘れて

ました、早く帰らないと…」

「はい……」

何か急に落ち込んだ…。仕方ないここはドラマのワンシーンだと思い込め。俺はアミツドさんに近寄って頭をポンポンとして「元気出しなよアミツド」と言っって笑顔で見つめる。

反応が無いが、お金も払って商品は貰ったし帰るかなあ「また来ますね」そう言っって俺は店を出て行く事にした。

無事にホームに帰って来たら、ソファアでスライム
の様にへたくツとしてる神様に、小声で話しかける
とゆっくりと起き上がって薬を受け取る。

泥人形だなあウチの神様。さっきのアミッドさんは
照れてる感じが、虐めたくなる衝動が…。危ない俺
主人公だ!?俺は主人公だ!?よし。

今日は神様がダウンしてるのを、カサンドラが看病
してくれるらしく、俺は用事が終わったら甘いもの
買って来る約束をした。

バックパックを3つ程持って、ノームの貸金庫に向
かう道中を近道に、裏道を使う事にした。それが間
違いだったのかは分からないが、前後で黒ローブの
集団に挟まれる。

「誰だお前ら?」

「きつ貴様の所為で俺達は!?!」

「あほロンの…」

「アポロン様だあああ」

恩恵無しだが咄嗟に嫌な予感がして、俺は全力で回
避すると、ヒュアキントスらしい奴以外は首に手刀
で気絶させて、ヒュアキントスにデコピンをする。

3M程吹き飛び、額が内出血していて涙目になって
居るが、目線は片手剣に行っているの、怪しく思
い拾いあげる。

「いつ一般人に刃物を向けるのか」

「何でそんな焦ってる?」

「何を言ってる…」

「ならこれで刺して、ポーション使ってあげるよ」

「いやっ!?それでも俺は一般人だぞ」

「俺を殺そうとしたのに?」

明らかに動揺してる…。【呪道具】か? 確かタナト

カースウエボン

スファミアのバルカ・ペルディクスが製作者の筈だ【闇派閥】が関連してるのか。

「これ【呪道具】だろ? 【闇派閥】だったのか?」

「ちつ違う!?俺は闇派閥じゃ無い」

【呪道具】は否定しないのか?」

「……殺せるものならやってみろ」

「分かった」

俺はヒュアキントスの両腕を、刀で切り落とすと腕を見てから状況を理解した。尻餅をつくと命乞いを始めた…。

「お前が言ったんだろ? ヤレるならって」

「本当にヤル奴が居ると思わないだろ!」

「はあく俺はお前に殺され掛けて、何でお前は助かると思ってたんだ?」

「きつ貴様はカスつても無いだろ」

「問題はそこじゃ無いだろ?それに完全な逆恨みだつて気が付いてるか?」

「どこがだ? 貴様がアポロン様を天界送還さえしなければ良かったものを」

「その前に、俺にちよっかい掛け無ければ良かったと、思わないのか?」

「は?アポロン様は神だぞ、神が言うなら従って当然だろうか…」

俺はもう話ししたく無く、気絶させポーションを掛ける。腕はヒュアキントスの上着のポケットに突っ込んでから、全員をロープで縛って【精霊の威厳】を使って跳躍して一気に外壁の外に出る。

そのまま全員を担いだまま、北部にあるベオル山地

に向かつて行く。北上すると周りは木々が少なく灰色の山のみ、全員をそのまま起こして質問する。

「まずお前ら、この襲撃は誰の提案だ？」

「「「ヒュアキントスだ!?!」」

「なっ裏切る気か？」

「でもお前らも、俺を殺そうとしたよな？」

「「ちっ違うー!」」

「もう良いや…」

俺は全員の足を斬り裂き、ポジションを掛けて死なない様にすると、皆の中心に頭の3倍程の岩を置くと立ち去った…。

俺は自分で最後まで、殺す勇気が無いのだろうかと思ってしまう。それでも確実に俺の手は血塗られて行ってる。

俺は自己嫌悪を抱く中、それでも俺は守りたいと思う者が既に存在する。ノームの貸金庫に行くと中に大量のヴァリスと魔法石、魔導書3冊に魔導具が7つ魔法石は全て梱包してバックパックに入れる。

大量のヴァリスは、直接バックパックに入れて行くが2つが一杯に成ってしまう。ヴィーヴルの時は1つだけで5億入ったのだが、それを2つもだからなあ

俺は屋台に寄って、クレープなどの甘いものを購入してから、一度ホームに戻る。バックパックを自室の金庫にそのまま入れて、甘いものをカサンドラに手渡すと部屋に戻って、魔導書を1冊手に取る。

1冊使っても3冊残るので躊躇いは全く無い。先程カサンドラに30分後には、起こして欲しいと頼んだので起こしてくれるだろう…。

魔導書を開いて読み進める…。

文字がだんだんと浮き上がって来る…。

顔を形成すると、俺に話し掛けて来る…。

顔の無い人物…。

『さあ、始めようか』

「そう言うの要らないから」

『君は知ってるからね』

「で、俺の望みは望むもの終焉と起源を決める力」

『神を殺したり誰か怪人を元に戻す?』

「望むならな」

『使い方間違ったら君は魔王だね』

「その時は俺が自分を消すよ」

『頑張って【リンドウビヤクヤ鈴堂白夜】』

「ああ! 【神カオス】」

『君に良き未来を…』

俺はカサンドラによって起こされた、早く起こされ過ぎたのか少しくラクラする。ヘステイア様に更新して貰わないとな。

良き未来か、カオスを否定し無かったなあゝ合ってるのだろうか? 確かめようが無いのだが、原初の神

で有限の神を超越した無限を司る神か。

俺はヘステイア様に頼んで、ステータスを更新して貰って居るが、何故か時間が掛かって居るようだが何かトラブルかな？

「ヘステイア様？」

「きつ」

「きぎ？」

「きつ」

「木？」

「君は!? 何て魔法を発現するんだあああああ」

「そんな事を言ってもですね、俺には守りたい者が

沢山有って欲張り何ですよね」

「ね♪じゃなあああい！君は僕の心配を知らないの

か……君の……寝言は……誰も傷付けたく無い……どう

して君は、何でも背負って行こうとするんだ!? 頼

りにならないかも知れない。

けど……けど君の家族なんだよ? お願いだ君の背負

う僅かでもいい、辛いなら泣いたっていい! 僕の前

で強がるな! 君は本当は泣き虫だ……お願いだ」

「神様……人も神も傷付けたく無い……です」

「知ってるよ」

「みんな……笑って居て欲しい」

「僕は誰よりも、君に笑って居て欲しいよベル君」

俺は本当は限界だったのかも知れない、平和な世界で生きてきた年数。価値観や自我は前世で既に構築して居た。それがこの世界では人の死は結構身近で

近所の誰々が亡くなったなど、普通に起きてしまう事なのだ。

生かす為に殺す…。

戦争だな。

9話 クノツソスと妖精の心

俺は泣いてしまった後、神様に抱きしめられて眠ってた見たいだな。神様は隣で眠ってる、起こさない様に立ち上がって床に落ちてる紙を見る。

ベル・クラネル

Lv7 | 半精霊人

力 | B706 > S952

耐 | C653 > A879

器 | S982 > SSS1500

敏 | S934 > SSS1416

魔 | B718 > SSS1147

剣士 : S

幸運 : A > S

対異常 : B > A

精癒 : D > C

共闘 : E > D

守護 : F > E

《魔法》

アルパノクティ

・ 光属性 : 付与魔法、光速移動可能、認識阻害

超短文詠唱 : 【精霊の威厳】

オムニスインベリウム

・ 付与魔法、自身の武器のみ付与可能

短文詠唱 : 『原初の業を我に』【終焉と起源】

※終焉の対価は相手の苦痛

※起源の対価は相手の記憶

□

《スキル》

【羨望一途】

- ・ 早熟する
- ・ 想い焦がれる程、効果は上昇
- ・ 運命の裁断、運命を超える事で【エクセリア経験値】上乘せ
- ・ 副次効果で精神干渉【チャーム魅了】などが効かない

【精霊の家】

- ・ 護りたい者を守る時、全アビリティ超上昇
- ・ 直感、本能が上昇し危機を予感する
- ・ 護りたい者への想いで効果上昇

【英霊の欠片】

- ・ 護りたい者の命が失われると、己の魂が壊れる
- ・ 愛が深まる程に相手の思考が分かる
- ・ 不条理を覆すチャージ権を能動的に使用可能

苦痛と記憶かこれはまた、嫌な対価だな苦痛はまだ良いが、記憶とか嫌な事も全てだからな。俺は自分の魔法の対価は、俺の心の投影だと直ぐに気付く。誰も傷付けたくならせめて痛みを理解する、救う者の望みを知る事。大きな力には何かしらの対価が付きものと言うのが世界の理りか…。

俺は今日の予定である、戦闘服の受け取りと装備の受け取りに向かった。初めに戦闘服を受け取ったのだが、着心地が悪ければ言ってくれとの事だ。

バックパックに綺麗に入れて、ヘファイストス様に

会いに行くと、ヴェルフにWコルブランドがヘファ
イストス様と一緒に居た。

「今日は1人なのね」

「今日は各自で、する事が有りましたから」

「そうなのね、椿は早く貴方の所の子に、武器を使
わせたいと言っていたのに残念ね」

「それは申し訳無い事をしましたね、近い内にでも
彼女を寄こします」

「そうしてくれるかしら」

俺は全員分の装備の説明を聞き、調整は必要無いよ
うにはしたが、必要なら遠慮なく言ってくれと全員
に言われる。

ヴェルフは俺が装備すると、自分の腕と俺のレベル
に見合っていないと呟く。なら登って来いと伝えると
椿さんに頭を下げて、レベル上げに付き合っ
て貰える様に頼み込んで居た。

ヴェルフはその日の自分を殴ってやりたい、そう思
わせる未来が待っていた。椿さんは試し斬りのみで
Lv5まで辿り着く様な、ダンジョンにネジを何本か
落として来た様な人だからだ。

ホームに荷物を置きに帰ると、俺は戦闘服の着心地
を確かめようと、自室で着替えるのだがこれはちよ
つとなあく俺を女装趣味だとも思ったのか？

俺の戦闘服は中性的より女性寄りな、後ろが長く前

は超ミニなフレアスカートだからだ…。まつまあ黒のパンツを合わせたら良いのか？

オフショルダーのワンピースを改造した様な、肩出しの戦闘服、タートルネックで喉仏隠す仕様とか完全に女装っ子だと思われてる…。

ダークパープルの戦闘服に、黒のパンツでハイブーツを履く、これがアミッドさんとかリユールなら綺麗系のお姉さんだな。

俺は辛うじて男の娘で、3分の1は女性分を醸す格好だが、もう諦めようこれは舞台衣装だ…。大丈夫な気がして来たのでこの上から、ヴェルフの防具を付けて行く…。

ヴェルフの心臓部分を守る構造が、仇となって微乳ぽい感じに見える。側から見たら女装では無く女性だなあ〜この方が恥ずかしくは無いが。

———
【クノツソス】

打刀を腰に差し小太刀も共に帯る、レッグホルスターにポーション類を入れて行く。足首にナイフを取り付けて、ウエストポーチにダイダロスオーブを入れると、ハデスヘッド【漆黒兜】を革袋に入れて肩に掛ける。

【精霊の威厳】で誰にも見られずにホームを出て行くくと、ダイダロスの旧排水路に入って行く。目の前にはクノツソスの入り口が見え気合を入れる。

【漆黒兜】を革袋から出してかぶる、獣人対策に特殊な香水を振り掛ける。1時間半は誤魔化せる筈だが早めに切り上げる。

俺の目標は『ダイダロスの手記』と闇派閥の2柱でタナトスとイケロスを消滅させる事だ。俺は自分の感を信じて進む。

研究室の様な場所に出ると、そこには剣が大量に置いてあるのだが、あれは【呪道具】だろうか。今は持って出れないので、簡単な地図を書いて場所を記載してから手記を捜す。

本棚の違和感が気になり探ると、変な紋様があり中央には『D』の文字がある木箱を見つける。仕掛けが無いか入念に調べてから開けると、分厚い本の様な革張りの物を見つける。

中を見るとそこには【ヒエログリフ神聖文字】で書かれた図面などがあつた。これが『ダイダロスの手記』だろうと思ひ革袋に入れる、本棚に綺麗に箱を戻して次の目標に向かう事にする。

「そう言えば最近ヴァレットタを見ねえが？」

「確かにあの殺人狂に、ここ最近会わないな」

「どうせどっかで人でもやってんだろ」

「そうだな、アイツがくたばるなんざ想像出来ん」

俺はこのこの団員達を、バレない為に見逃して行くしかない事に、苛立ちを感じているが心に根づく大英雄の魂が、自分を冷静にさせてくれるのを感じる。

手記の地図にある、9階層でクノツソスの中心部に当たる場所に目星を付け歩を進めて行く。7階層に中間基地の様な、戦闘を想定した場所に辿り着く

とそこにはジュラ・ハルマー怪物趣味のアストレア
ファミリアの仇を見つけた。

俺は周りを見渡し、他に誰も居ないのを確認してか
ら背後に忍び寄り首に手刀を入れ気絶させると、少
し戻った場所に隠せる所があったので担いで行く。

奴を倉庫の様な、普段滅多に人が入って居ない様子
の場所を見つけ、そこに有ったロープで縛り落ちて
いる革袋手袋を口の中に突っ込むと、上から縛って
置いて行く。

9階層に着くと、少し先に多数の気配を感じる。そ
の先の部屋に神の気配を感じ取ると、ナイフを2本
足首から取り『原初の業を我に』フイーニスオリゴ【終焉と起源】を
初めて使う。

魔力は消費しないのか？精神力を消費した気配は一
切無いのだ。多数の気配がある部屋を覗き見て居る
と、デイツクスと怪人が居ないが兄のバルカはここ
に居る。

「なあ？何か匂わないか？」

「いや？てかお前は獣人だが、俺はヒューマンだ」

「そりゃ分かんねえよな」

「馬鹿にしてんのか？ああ！」

「ウルセエ!?!黙ってろ」

俺はバレルの前に、神を消滅させるしか無いと思いつ
殺する気で【精霊の威厳】を使い奥の小部屋に突貫

して行くと、視界に捉えた瞬間眉間に投擲…。

「——クッ!？」

痛覚を残したまま、頭から巨人にすり潰されてる様な超激痛に視界が歪む。神は眉間を中心に吸い込まれるかのように消えていった。

気を失う前に全員を…。

気が付くと俺は、ジュラと同じ倉庫で目覚めるが目の前のジュラは、重い箱を腹に乗せられもがいて居るのが最初の景色だった。

自分自身は無傷だが血塗れの己を見て、震えそうになるが唇を噛み自我を保つ。血を持つてるポーションで流して行くと最後にエリクサーを飲む。

右手には血塗れの、ダイダロスオーブを持って居たので、倉庫に有るローブで拭ってポーチに入れてから、ジュラを気絶させ担ぐと直ぐに歩き出す。

出入口近くに有った、剣の山をジュラと一緒に担いで一度外に出る。ホームの端に有る鍛冶場の倉庫に剣を置いて、ジュラをバックパックに詰める。

鍛冶場の鎖で逃げられない様にすると、俺は再びクノッソスに手記を見ながら目的地に急ぐ。そこには5人程の闇派閥の団員が居るが、恩恵を失った彼等では赤子も同然…。

「やつやつああああ!？」

そこに居る奴等の腕を斬り裂いて行く、ポーションで止血して足首を踏み砕く……。これが英雄と言えるだろうか：俺は怪物なのかもな。

近くにあった鍵の束を持って奥に進む……。そこにはゼノス達が捕らえられて居て、まだ生傷が有る者も数人居る。

「俺はリド の仲間だ、助けるから騒ぐなよ」

「二「ああ（はい）」二」

「傷がある奴がポーションを使つて欲しい」

「感謝……スル」

「すまないな、同じ人間として謝らせてくれ」

「貴方が、気にしないで」

「ありがとう……」

俺は全員を出すと、ここからダンジョンに向かうにしても、この人数では時間が掛かり過ぎる。壁際为天幕の様な真っ赤な布を人数分三角に切ると、性別別に大きさを変え男は腰布、女は布を胸元辺りから巻き付けホルダーネックの様に首裏で結ぶ。

これで一応全員普通に、言う事を聞くモンスターに見えるだろう。俺はこれから冒険をするが、こいつ等に釘を刺して置くか。

「今から地上に上がるが挙動不審になるな、そして

人間に会ったら女性は笑って手を振れ。男性は親指を立てて、こんな風にしろ！いいな？」

「「はっはい（ああっ）」」

「絶対に離れるな!?殺される可能性が有る」

俺は全員が分かった事を確認すると、アルミラージュの可愛い奴を抱き上げて、全員に合図をして街に上がって行く。

「何だあれ？モンスター？でもアイツLv7の」

「また何かやってんのか？」

「今度は何してるんだい？」

「こんなにちわ♪こいつ賢いから襲わないし触る？」

「…確かに可愛い」

「お前達もつと愛想良くしろ？」

宣伝する様に俺は、街を堂々と歩き回りながら今回は毎年と違う【怪物祭】だと言って回る。ゼノスから尊敬の眼差しが背中に刺さるが気にせず笑う。

噂は瞬く間に広がって行く『可愛い女の子が、小動物の様なアルミラージュを抱えて、一風変わったモンスター達と歩いてる』何で女の子…？

手を振って、みんなも今を楽しみながら歩くと大通りは混雑して行く。ガネーシャ様の機転で整備を団員が行いながら、街の人々に声を掛けられては止まると言った感じでガネーシャファミアリアに入って行った…。

ここでも元俳優の才能を遺憾なく発揮した。どうにかガネーシャ様と団長のシャクテイさんに説明して

から、後でウラノスには説明すると告げて出た。

——【ジユラ・ハルマー】

【豊饒の女主人】にバックバックを背負って向かう
中で、連れて行くべきか未だに迷う。店内は時間的
にも殆ど人は居ない。

先ずはミアさんに大先輩に相談すべく、店内に顔を
出しミアさん呼び出す。ミアさんは夕方の仕込み
中で少し不機嫌だが仕方ない。

「急にすみません、相談は今ここにリユースさんの最
後の仇が居ます。彼女に教えて決着を付けるかのが
良いか、このまま俺が終わらせてしまおうと言うのが
良いか悩んでいます」

「教えちまいな!!小石を退けた道ばっか歩いてた
ら、アンタが居なけりや何にも出来ない奴になつち
まうよ!それに気持ちはアイツの問題だよ…少しそ
こで待ってな」

「ありがとうございます」

俺が待つて居ると、着替えて来た彼女が目の前にや
つて来た。表情は固く小太刀を強く握って居るのを
見て、頭を撫でてまだ待つて欲しいと言う。

一緒に外壁を越えて、また北部のベオル産地に来て
居た。俺は背負って居た奴を出してから、ポーシヨ

ンをリユーさんの横に大量に置く。

拷問用に買った訳では無い、鍛冶道具もリユーさんの後ろに置いて、近くの木を刀で斬り倒してから杭を数本と大きな柱を作って立てる。そこにジユラを縛ってからリユーさんに近付く。

「俺は本当はリユーさんにコイツを合わせるか悩んだよ…。貴女は生真面目でこの事を自分の枷にしてしまうって分かってる。

闇派閥に潜入してて偶然見つけた時は、これで良いそう思った…。

でも今は…：貴女の心が本当は望んで無い…：そう俺には感じられる。

リユー・リオンそれでもやるのかい？答えてくれな
いかな、強がりで弱虫で恥ずかしがり屋の綺麗な君の気持ちをも、俺は君の望みを叶えるよ」

俺は彼女を抱き寄せると、頭の後ろを優しく撫でながら語り掛ける。彼女の震えが激しくなつて行くと俺の心は、逆に静寂が訪れる守りたいこんなにも弱い彼女の心を…。

「…：私は…：もう戻れない…：あの時の彼女達の笑顔が…：忘れられない…：助けて…：ベル」

「ええ…：助けます…：貴女の心を守ります」

彼女は泣き出してしまおうと、泣き止む頃には寝息を立てて眠ってしまう。彼女を小さな岩の近くにロ―ブを敷いて、小岩にも垂れ掛かるようさせる。

彼女から少し離れた場所に、ジユラを移すと手に杭を打ち付ける。痛み悶える奴の耳を鼻を唇を斬り裂きポーシヨンを掛ける。

「あふまが、ひほほろしめ!？」

——（悪魔が、この人殺しめ）——

「知ってるよ……誰かの英雄って事は誰かの敵だ」

足首を捻じ切る…。

奴の言葉にならない声が木霊する…。

至る所に奴だったモノが転がって行く…。

やがては殺して欲しいと願う奴を見下ろし…。

殺さずにポーシヨンを2本飲ませて木に縛る…。

俺は全てを回収してから、リユースさんの元に行きながら、自分の心を殺して行く。リユースさんを抱き上げてからホームに向かう。

開けたままの窓から入って、彼女をベットに入れて寝かせると、俺はシャワーを浴びに風呂へと向かって行く…。

全てを湯に流してから部屋に戻る、ローブのままの状態だったリユースさんの装備を外して、再び布団を掛けると俺は部屋を出て【豊饒の女主人】へ行く。

ミアさんに事の顛末を話すと、抱き締められて背中を摩られる。俺は声を殺して泣くと、アンタは最高の男だよと言われ頭を撫でられる。

暖かい飯を人が見えない位置で出されて、無言で食ると俺は今日だけで、数え切れない命を奪った。それでも生きて行かなければならない。

リユーさんの気持ちは、こんな感じだったのだろうかと似た状況で始めて思う。お金を払うと俺は普段通りに戻って、ギルドに行き報告を済ませると部屋のベットに倒れ込んで眠りにつく。

10話 第一次大鐘戦争

——リユー・リオンのデレ期

朝目が覚めると、リユーさんが目の前でこちらを頬を上気させて見つめてる…。何か昨日は？そのままベツトに泥の様に眠っただけだ。

リユーさんは涙目になって抱きついてくるが、俺は何も言わずに、彼女の甘えを受け入れる事にするしか無かった。

「…………ベル…………好きです…………撫でて欲しいです」

俺は黙って撫でる、そんな気はして居たよ堅いエルフが何も無いとは言え、同衾をしてるのだからそれ想像付くし、惚れさせる要素は満載だけど展開が早過ぎて主人公を置いて行く。

「…………キス…………したら…………ダメですか…………」

俺は今究極の選択を迫られて居る…。そうかここは保留に近い処置を行う。俺は頬に手を当てて顔を近づけ唇の横である頬に、若干怪しい位置に触れる。

「今はこれで我慢して下さい。俺はまだ誰かと言うう相手をリユーさんに、決めて居ません」

「私は…………側に…………ベルの…………温もりが届く場所に置いて貰えるのなら、こうやって触れられる事が凄く…………幸せです…………愛しています…………」

「リユーさん…………」

「リユーと呼んで下さい……襲っちゃい……ますよ」

「リユーはこつちが本当なの？」

「どつちも……私ですよ……甘えて無いと抑えられない
です。ベルが……苦しい程……好き何です」

「リユーは意外と攻めて来るね」

「攻めて無いです……求めて、ます」

「いつまでこの状態で居るのかな？」

「唇に……キス……してくれたら直ぐ退きます」

「それ以外は？」

「……貴方の……モノに……／＼」

「流石にそれは出来ないよ……手だけ貸そうか？」

「……んっ……」

俺は予期せぬ出来事に出会い、処理の許容範囲を越えてしまう。リユーが二度寝をしてから額に唇を落として、耳に掛かる髪を後ろに流す。

手紙を書いてから枕元に置くと、俺は装備をしてから外に向かうが、カサンドラがやけに冷たかった理由を考えたが、もしかして部屋に来たのか？

バックパックを持って、エリクサーを買いに向かう道中は、街の人に今日も可愛いねと言われる始末であつたのだ。

昨日の宣伝凱旋も影響が大きいだろう、俺実は男なんですって、カミングアウトしないと駄目なのかも知れない……。

冗談は良いが俺って結構有名なのな、二つ名貰ったのにあるっていつ使うんだ？まあ恥ずかしいから使わずで構わないがな。

どうせなら、前世の【白夜】とかが名乗り易いのに
なくともそも白夜がこの星に在るのか？公転だと
か自転するとかは…。

脱線してたな、今日はエリクサーが居るからディア
ンケヒトフアミアで買わないとな。ナアーザさん
デュアルポーション早く作れば良いのにね。

確か30階層のブラッドサウルスの卵と、ブルー・パ
ピリオの翅が材料だった気がする。卵はオラリオ外
のモンスターで採取可能だよな…。

セオロの密林で合ってるっけ？流石に全部は覚えて
無いからなあ…。特定のモンスターを集める為には
豎琴キタラを買って行けば良いし。

——アミッド・テアサナーレの恋の病？

ディアンケヒトのお店に着いたが、何か忘れてる様
な気がするんだよな？気の所為だろう。扉を開いて
中に入ると、アロマなのか微かに良い匂いが…。

「こんにちわ、アミッドさん今日は雰囲気が違う気
がしますがイメチェンですか？」

「あっ!?／＼いついらっしゃいますよ！ベルさん」
「いらっしやいました♪所で雰囲気変わってる
んですか？恋でもしてるんですか？」

「ごっごっご／＼」

「そう恋です、堕ちちゃったんですか？乙女ですね

アミッドさんの反応が可愛いですよ」

「こっこれが…恋…」

「どっから見ても何か上の空って言うか？ふわふわしてると言うか、幸せそうですよ」

「いつ意識したら／＼…話せ…無く…胸が痛いです」

「大丈夫ですか？顔が真っ赤になってますよ？」

俺はアミッドさんの額に手を当て、熱が無いかを確認してみる…。少し体温が高いし若干だが汗を掻いてるな、涼しいのに調子悪いのか？

顔を覗き込んで「大丈夫ですか？さっきから息が辛そうですけど？」俺は店内の手洗い場でハンカチを濡らしてから、彼女の元に戻って額や頬を冷やして上げると、やっと反応してくれた。

「はっ!?すみま…せん／＼ハンカチ使わせて…」

アミッドさんはそう言い、俺が持つハンカチを俺の手も一緒に、上から押さえて潤んだ瞳でこちらを見ている、何かデジャブだな…。

沈黙が店内に充満していると「んんッ！アミッドお前は何をしている」そこには、小太りの男神が居ただった。

「えっ／＼」

「それで、何を店番中にチクリ合っておる」

「えっえっ／＼」

「こんにちわ！ディアンケヒト様、誤解ですよアミ

ッドさんが少し熱っぽくて、ハンカチで冷やしてた

「んですよ？少しだけ赤みも引きましたが、無理はしないで辛い時は、周りに居る家族ファミリーに頼る事です」

「はっはい／＼／＼」

「ぼわあくつとした顔に成り、潤んだ瞳で見つめて来るのだが、ディアンケヒト様には脛をゲシゲシ蹴られるのだ…。」

「この朴念仁め!? 貴様は何処のミアハ一派だ!？」

「人様の団員を、只の駄目っ子にしてくれおつてからに、貴様の責任だ沢山の金を使って帰れ!？」

「そうでした…エリクサー20本を下さい、後はです」

「ね高等回復薬を2ダースと、精神力回復特效薬を1ダースそれと、アミッドさんを休ませて下さい」

「俺はバックパックから1250万取り出すと、カウンターの上に置く、ディアンケヒト様は言った物を取り出すと、悪態を吐きながらも会計してくれる。」

「多い分は、アミッドさんを休ませる対価です」

「べっ！ベルさん／＼……………うう／＼……………」

「アミッド…お前は今日は役に立たん、帰って寝ていろ、そしてそのミアハ2号！貴様はアミッドを送ってから帰れ、それがお前のケジメだ」

「俺は快諾すると、アミッドさんは上気した顔で準備をする。やっぱりの感じ今朝見た…。リユーと同じ顔、え？俺が相手何ですか？」

さつきはディアンケヒト様に、朴念仁と言われたしミアハ2号と言う、不名誉な渾名まで付けられたのは、そう言う意味だったのか…。

接点が少な過ぎて、どこに惚れる要素が有ったと言
うのだ。偶に回復薬を買いに来て、軽くおちよくつ
て帰るのがいつものパターンだが……………。

まあ、まだ決まった訳では無いよなあ、確かに綺麗
優しくてその上仕事が出来る。上司は意地悪^神だけど
頑張ってる所にも好感は持てる。

「…………ベル…さん／＼準備できました…………。お願い…
します…………」

「はい♪宜しくされました。では行きましょう」

俺は現実逃避をする事に、一応病人扱いだから手を
繋いで、道を聞きながら進むのだが、アミツドさん
の好きですオーラが凄い…。

仮に文字が見えるなら、俺の後頭部に好きと言う言
葉が、何回もぶつかって来てるな。繋ぐ手を指で微
摩って大切そうに握って来る。

振り返らなくても表情が分かってしまう。鈍感主人
公に成りきれない己が悔やまれる…。歩くスピード
が子供に追い抜かれるし、どこでそんなに惚れたん
だよ!?

「アミツドさんは、好きな人のどんな所が良いんで
すか?どこに惚れたんです?」

「えっ／＼……………しい／＼」

「へ？すみません…聞き取れなくて」

「アミッドさんは目を逸らして、真つ赤な顔でもじもじしている…。何を言うのか正直気になるのだから仕方ないよな。」

「アミッドさんは潤んだ瞳で、息は上がって居て倒れるのではと思ってしまう。意を決したのか少しだけ口元に力が入っている。」

「えつとです…初めて会った時は可愛いなあって思ってそれから話す回数が増えて行っただけですが彼はいつも気安くて下心の多い方とは違う安心出来る雰囲気があるってです…最近ちょっとだけ膝枕して貰って居る時に頭撫でられた時に普段は駄目なディアンケヒト様の所為で疲れ切った心が暖かくなってもっと撫でられたいって思って途中から寝たふりしてたんですけど彼はそんな私に「起きないならキスします」って言ってキスされちゃいました——ツ／＼それがもう決定打ですけどもう寝ても覚めてもベル君に会いたいって思っちゃうんですよはあくだから今手を繋いでるのがこんなに幸せ何ですよ分かりませんよねもう今すぐ路地でぎゅーってしたいぐらいふわふわして多分このままだと溺れちゃって何も手に付かなくなっちゃいますよだって初めての恋ですよ自分の感情のコントロールが効かなくて困ってますよ…はあくお家に持って帰りたい…」

「俺は凄く饒舌に想いを語る、アミッドさんの話を聞いて思った。途中完全に俺の名前出てるし、俺がボカして話した意味無し。」

「それとキスしたと思ってる彼女に、今更実はあれは指でした何て言えます？無理です!?!お兄さんには」

そんな凶太い神経は通って居ない。

俺はこの時はまだ知らなかった、女の戦争には撤退や講和と言う言葉は無く、勝者と敗者が存在するだけなのだという事を…。

ファーストグランドベルウオーズ
【第一次大鐘戦争】

これは後日談だが、毎日の様にアイズさんに会って居たのに…。この前の親睦会の後から、街中ですら会わないのには訳が有った。

親睦会の前に、アイズさんが改宗すると言い出したアレである。実際に親睦会の後にアイズさんは、ロキ様に言ったらしいのだが。

問題はそこだけで止まらなかった「ええくアイズがするなら私もする」とテイオナさんが言うところ、アイズ親衛隊の筆頭であろう、レフイーヤさん当然ここは二の句も挟ませず、私もと言い切った。

そこで匙をぶん投げたのは、リヴェリアさんで有ったのだから幹部も驚天動地であった。普段なら折れずに懇々と説き伏せるだろう。

義理の娘見たいなアイズと、愛弟子のレフイーヤが移籍となる。そしてホームの居心地が大きいのだろうか？

そしてその結果、俺はアイズさんに抱き付かれて居る上に、リユーさんに偶然にも出会って、リユーさ

んにアミッドさんがアイズさんを引き剥がす。

「アイズさん？急にどうしたんですか？」

「ロキに、改宗…したいって言ったら…駄目って」

「え？本当に言ったんですか!?!」

「私も…あのホームに住む」

「そう言われてもですね…泊まりに来ますか？」

「駄目です!?!」

「…何で…」

「二女の子が男性の家に泊まる何て駄目です」

「リユースは昨日、俺の部屋に泊まったのはやっぱり駄目だったのか」

「え!?!どつどつ言う事ですか？私にキスして来れ

たのはただの遊びですか…」

「ベル!?!どう言う事ですか？私がしたいって言

うのを断った時、まだ相手が居ないって…」

「何か…ムカムカする……ベル私もする」

「ちよっ!?!」

「ちよっ!?!」

一瞬の出来事だった…。アイズさんは俺の服を引つ張ると、唇を何の躊躇いも無く押し付けて来たのだ。その勢いで俺はアイズさんの上に、覆い被さる様に倒れ込んだ。

「ちよ!?!アイズさ!?!」

アイズさんは、そのままの状態で俺の首に腕を回して、再びキスをして来たのだ…。リユースとアミッドさんは涙目で、必死に引き剥がそうとして居るのだが、Lv6相手では簡単に行かない。

俺は地面に手を付いて居る為に、抵抗が出来ないで居ると、遂にはアミッドさんは泣きながら必死に剥がすのを、アイズさんも泣き出したアミッドさんを見て、動きが止まって首を傾げる。

リユーさんも涙を流して居る状態で、周囲からしたら俺は屑にしか見えない。俺は3人の手を引きホムへと向かった。

俺の部屋に4人で入って、3人とも俺のベッドに腰掛けて居る…。ソファアが有るのにだ、アイズさんは自分が原因だと、少し感じて居るのかどうかは分から無いが複雑な表情で居る。

「まず言い難いけど、アミッドさんとキスはして無いんです。こうやって指を二本使って振りをしてたんです…ごめん、気持ちを弄んだ様に成ってしまってます…」

「そう思うなら…今して!?!我慢出来ないよアイズさんの件が無ければ、また機会をつて思えたけど…やだよ…私がこんなに独占欲が強何て思わなかった」

「ごめん…なさい…」

「私も嫌です…ベルが…誰か一人に笑い掛けてる何て…なら私もして下さい」

俺は結局追い詰められて行き、全員で今は床に転がって居るのだ…。アミッドさんに襲われキスして来

たのだが、ここでリユールだけ駄目と言えなく成って結局リユールもして、アイズさんは何故かまたキスして来て、しまいには終わり無き戦いに成った。

11話 新メンバーの急増

その後はと言うと、アイズさんが改宗を諦める事も無くて、リユールが改宗すると言う事が発覚と言うよりも、リユールが言って自慢して居た。

そこからアミッドさんも、改宗したいなどと言い出して、ならミアハファミリアでも提携してから、敷地内に店舗でも作るか、何て冗談を…嫌！冗談でも無いかなあゝ

正直言うなら、アミッドさん居たら凄く心強いから欲しい人材ではある。アイズさんも戦力としては優秀で俺の言う事は、割と聞いてくれるしな。

「本気で言うなら、俺は歓迎するよ」

「私は本気です!？」

「私は…最初から本気」

「そうだ、リユールの件だけど迎えに行つて貰ってるから、恐らく明後日にはこのホームに着くよ」

「はい、ありがとうございます…感謝してます」

「ううゝ負けてる気がして来ます…今から改宗の件言つて来ます!？」

「私も…駄目なら家出」

「それなら、私もそうします…不束者ですが未永く宜しく願います…ベルさん」

「私…行つてくるから、話して…ロキ連れて改宗しに来る」

「あはは…待ってるね」

リユードだけが残って居るけど、神様がどう成ってるのかを聞きに来た…。朝はリユードが俺の寢床に居たし、今度はアミッドまで連れて来たら、色々思うのは普通だよなあゝ

「神様…もしかすると、少ししたらロキ様が来るかも知れませんが、今回は正直に言うんですけど…。可愛そ過ぎるので何も言い返さないで下さい」

「分かったよ…極力だからね」

「今回アイズさんが改宗ってなった場合、アイズさんに会いに来る事を、認めて上げようと思う」

「僕としてもそうさせて上げて良いと思う」

「後…アミッドさんが改宗したいって言ってるよ」

「はあくベル君がミアハに見えて来るよ…」

「それ、ディアンケヒト様も言っていました」

「ぐぬぬぬっ!?生涯で一番の侮辱だよ」

「それは…いやそうかもですね」

結局は来てからと言う話に成って、神様がリユードがいつ引越せるかを聞いて来て、確かにそれを俺は聞いて居なかったな。

引越しの準備は、既に終わってるらしくいつでも引越せるとか。なら団員で手伝って一度で済ませようとの事で、明日決行することになった。

——ロキファミアとディアンケヒトの襲来

その時はやって来た、門前で騒がしいから見に行く、そこには「ミアハ2号出て来い」から始まったのだから失笑モノだよ…。

【ロキファミアリア】

主神ロキ

団長フィン・デIMUMナ

副団長リヴェリア・リヨス・アールヴ

ガレス・ランドロツク

ティオナ・ヒリユテ

ティオネ・ヒリユテ

レフィーヤ・ウイリデイス

アイズ・ヴァレンシユタイン

【ディアンケヒト】

主神ディアンケヒト

アミッド・テアサナーレ

女性団員5名

男性団員2名

この大所帯で話し合いを始めたが、多過ぎて話し合
いにならない。俺は何で行こうとする先に文句を言
うのかを聞いてみた。

「言うてもアイズたんは聞いて来れへん」

「貴様に言わずして誰に言う!？」

「仮にですが、彼女達が結婚するからファミアリアを

抜きたい、そう言ったら何て言うんです?」

「駄目だ（駄目や）」

「お前ら、存在自体が最早要らないな…『原初の業

を我に』【終焉と起源】もう一度聞く、眷属が幸せ

を選びたいと言ったら何て言う」

「ちよ!?ベル君駄目だ、ロキにディアンケヒト達

君達は、子供の幸せは二の次なのかい?」

「俺には関係無い、そんな物犬にでも食わせればい

いでわ無いか…」

「辞めて来れ!?ベル君…：確かに屑だが最悪アミ

ツドは戦争遊戯でいいんだ、君は何でも背負い過ぎだよ…」

「…：ウチは、条件がありなら考えたる」

「分かってますよ…：遠征への参加やいざと言う時は

惜しみ無い協力と、普段から会う事の許可って所で

良いですか?」

「それならウチは妥協したる…：必ずアイズを守つて来れるんやろな?」

「この命に代えてでも」

「それはあかん…：ベルたんはアイズたんの良心見たいなもんや、失つてもうたら心が持たん」

「当時です死ぬ気などありませんよ」

「あのおく私もアイズさんに付いて行きます!」

「何言うてんねん?流石にあかんで!」

「俺は認めん…：眷属とは親に尽くす物だ」

「神様…：こんな屑を神と言うのですか?」

俺の言葉をヘスティア様は、悲しそうに見て来るのだが、俺は最後に確認をする為に、刀を前に向けて聞いてみる。

「では神は何に尽くすんだ?お前の医術は何の為に存在する?」

「そんな物は、俺自身の為に決まっておろう。そ例

外は意味は無い、医術は面白いからだけだ」

「ヘスティア様もう良いですか?この屑は暴君と変わらない人は奴隷で、己は世界の覇者そう言うて居るんですよ…：殺人鬼も屑だが自由を抑圧して自分の幸せだけを追求するなど消えた方がいい」

「ベル君……駄目なのかい？」

「彼奴は闇派閥とさして変わりない、それを悪だと

知らない分タチが悪い」

「天界送還で良いじゃ無いか!？」

「それは消えない事を良いことに、己の行いを罰せ

られ無いと言いいずれまた繰り返す。ディアンケヒ

トに最終勧告だ、その考えを改め良き神には成れな

いのだな？」

「神に良いも悪いも無い!?!人の価値観で物を決め

るなど、神への冒涇だぞ俺を崇めろそうすれば無か

った事にしてやろう」

「そうか最早是非もなしか…」

俺は更に【精霊の威厳】を展開し、髪留めを外すと

ヘステイア様に渡して「ごめんなさい」と伝えると

神様はポロポロ泣きながら首を横に振る。

「原初の神カオス…貴方の生み出したものでは無い

が、それによる副産物だ此れよりあなたの元に返そ

う……」

俺は誰の目に見ても分かる程に、自分の力を込める

…。これをするとう精霊に近づくのを感じる、刀への

思いを強めて行くと、刀は存在が曖昧になり俺自身

も有り得ない程に神威が漏れ出る…。

「では次に生まれ来る時は、良い存在に成るといい

けどな」

「何を言っている…」

誰も俺が動いたなど感じ無いだろうが、ディアンケ

ヒトは霧が消える様に消えて行く…。俺は激痛を顔

に出さずに、毅然とした出で立ちで立って居るが皆は騒いでいる…。

「ベル君……」

「なっ何をしたんや!？」

「ディアンケヒトが消滅したんだよ…君には分かる

だろう?…この意味がベル君なら天界でも恐らく消せるんだよ…」

「何やねんそれ!ウチらは不滅やから神や」

「良い事を教えて上げます…」。

《神》

魂魄の昇華で言う最上階層

※生命維持エネルギーは必要無い

《精霊》

魂魄の昇華で言う中級階層

※通常人はここを経由しない

《人》

魂魄の昇華で言う初級階層

※魂魄の肥大の許可を得る

恩恵無しの場合には魂魄そのもの、それが俺の導き出した答えですよ…。本当に神って言うなら、下界で意思を持ち世界をどうしよう何て、思っては行けないんですよ。

悪意を司るから悪い訳では無い、悪意を持って下界で何かを成す事が駄目なんですよ。だって神でしようが何考えてんだよって成るしね」

「聞きたいねんけど、神力オスって誰や?」

「逆に聞くけど、ガイアって神は？」

「ガイア言うたら、この星の名前や」

「では貴方達は神では無いんですかね…」

「はぁあ!?! どう言う意味や?」

「そもそもタルタロスが有って、エロスは居るのに

何で「ベル君、実は僕たちが生まれた頃に、居なくなつた神が居るんだ」良かったですね、どうやら神なのは間違いない様です…。

《カオス》

無・有を有する存在（神）

《ガイア》

天・地を内包する最初の神

カオスは存在そのものですから、カオスが居なければ存在すら出来ません。神様達にとっての神見たいな存在だと思えば良いのでは？

ガイアは存在が許され、最初に生まれた神で大地や空と言つた惑星を生んだ神です。エロスが生まれてタルタロスも生まれてと、言うのがそもそも神様の成り立ちでは無いんですか?」

「ベル君は何で神が知らない事を、そんなに知って

居るんだい? 君は原初の存在が寄越した、使徒とか

なのかい…」

「正直に言くと、否定も肯定も出来ませんよ」

「何で否定出来ひんのや?」

「会話をを行ったかも知れないからですな」

「かもってなんやかもって!?!」

「本人が、否定も肯定もして無いからですよ」

「もうええは…んでどないするんや、ディアンケヒ

トがおらんのに…。ポーシヨンなんかはどないするつもりなんや?」

「凄く簡単ですよ?父より優秀な息子ミアハ様が居ますから…リリ悪いけどミアハ様を呼んできて来れ無いか?」

「ウラノス様にはヘスティア様が、俺が消滅させた」と伝えて下さい…。これが原因で罰を受けるなら喜んで受ける。神にも罰を与える事を躊躇わないとだけ伝えて下さい…。

因みに、ディアンケヒトファミリアからウチに来たという方は、居られたら言つて下さい。

薬剤部門を作ろうと思えますからね!そうだディアンケヒトの財産はミアハ様に行く様に、ウラノス様に伝えないとな…」

俺の行いで一同は、若干萎縮して居るがフィンさんが、因果応報と言うと皆か納得してしまった。アミツドさんに再び改宗の件を聞くと頷く…。

結果としては、ディアンケヒトはミアハに吸収されて行き、この場に居た7名以外の団員達は、皆ミアハファミリアへと改宗した。

今回付いてきた方は、アミツドさんを慕う者達だった様で、薬剤部門に加え俺は医術に関する前世の知識を、この世界でも応用出来ないかを考える事にしたのだ…。

ミアハ様に関しては意味が分かって居ないけど、父を消した事を謝った。ミアハ様はいくら腕が有つて

も、それをこの世界に貢献しないのなら意味は無いのだと言われ、悔いる事は無いと慰められた。

ヘステイアファミリアは、人数が大幅に増えたのもあるが、アイズさんとアミッドさんの改宗は、オラリオの隅々まで知れ渡る事となった…。

——ヘステイアファミリア

《新メンバー》

アイズ・ヴァレンシユタイン Lv5 (女性) ヒューマン

剣士で前衛『エアリアル』風魔法

アミッド・テアサナーレ Lv3 (女性) ヒューマン

『神秘』『調合』全療魔法持ち

ジェセル・イムテプ Lv3 (女性) エルフ

『調合』内科が得意 氷魔法

ソマリヤ・エイル Lv2 (女性) ヒューマン

『調合』治癒魔法・支援魔法

出雲・スクナビナ Lv2 (男性) ヒューマン

『調合』大太刀が得意 採取が趣味

リドニー・ノーデンス Lv3 (男性) ハーフエルフ

『医術』脳神経が得意 雷魔法

ポーエル・パナケア Lv2 (女性) 小人族

『調合』万能薬作りが得意 投擲がメイン

ブリード・ブリギット Lv2 (女性) ヒューマン

『医術』手術が得意 スキル急所突き

サルース・ヒュギエリア Lv3 (女性) エルフ

『調合』新薬製造が得意 水魔法

12話 イシユタルファミリア

今日は大忙しだった、リリにはギルドで改宗組の届けを出しに行ってもらってから、皆の引越しを行って居たらベート・ローガの殴り込みをアイズさんが捌く…。

その後、ミアハ様が『青の薬舗』の材料や設備を下さるとの事で、全てを台の上に乗せてリリがスキルで、一度で運ぶと言う荒技を披露してた。

ゴブニユファミリアで1億（ポケットマネー）を投じて病院を敷地内に建設依頼した。薬店を優先してもらう様に依頼して、店舗のみ使用を4日で可能にしてくれるらしい。

ナーザさんが3時頃に来て、【銀の腕】を2つだけ置いて帰って行ったのだ。大学は機械工学専攻だったので、作れるかもと思ったのは言わなかった。

全てが落ち着く頃には、みんな疲れていたので外食を提案して皆で【豊饒の女主人】で食事を済ませてホームで寛いで居ると、どこに行っても3人が付いて来るから「どこにも行かないよ」と言っても駄目で、結局は一緒に寝る事になった…。

翌日の朝

目が覚めたのが、結構早いので本当はミアハ様達の為にする筈だった、デュアルポーションの材料採取に行っている…。

オセロの密林までは、直ぐに着くと気配を探しながら周囲を散策して行く。5分程で見つけてからブラッドサウルスを殺さずに、素早い動きで卵を取って行くと奴等は何が起きたか理解する前に終わった。

一度ホームに戻ると、アイズが鍛練に付き合っただけじゃなかったらしく、不機嫌だったのでこれからは付き合うよと約束した。

俺が『ブルー・パピリオの翅』を採取して来ると言うので、付いて来ようとするので仕方なく一緒に向かう様にした…。

「何で……翅を取るの？」

「新薬に使うんだよ」

「新薬ですか？どの様な物を考えて居るのです？」

「精神力と治療を同時に行うポーションだよ」

「正に盲点でした、それで朝早くから出掛けていら

したんですか？」

「ああ、そうだよ！確かダンジョンの材料同士を使

用した場合、精神力の回復薬と怪我の回復薬は相性が悪いと聞いて、なら片方をダンジョンの外から採取したら、上手く行くのでは無いかな？」

「可能性は大きいですね、試す価値はあります」

「寂しい……ベル」

「ごめんなさい……」 ナデナデ

「ありがとうございます（ございます）／／」

「…ずるい」

『ブルー・パピリオの翅』は俺が狩ると、翅の数だ

けドロップすると言う現象に皆が驚く。俺が発展アビリティに幸運が有るのだと伝えると、とどめを刺すのを俺が全部する事になった…。

1時間程で80枚と言う異常も、幸運なのだろうかどうかは分からないが、次回採取は当分先で済みそう
で得した気分でもうホームに帰った。

帰ってからお昼の準備が始まって居て、誰か雇った方が良いのかもと思う程忙しく作っていた…。昼食を済ませると、調合の見学をするが製造方がかなり古代的だなあゝ

その材料で何を必要なかを聞くと、手帳に書き記すと前世の抽出方法で可能かを検証して行く。結果は当然だが、科学的根拠の勝利であった。

調合はハッキリ言うと、どの様なアビリティなのか
が俺には分からなくなってしまう。濃度や粒子の細かさなどは、科学の分野を活かすと容易に可能になってしまう。

話しを聞くと材料の工夫などを中心で、抽出と言う言葉は知って居るのだが、抽出は圧による物だけだと言う…。

正直に溜息が出た、俺は前世では結構勉強が好き
な方で、特に理数系で突き詰めて行くのが好きで、良
くレポートが異常な枚数で教授を困らせた。

分析用の機械を、謎理論の塊である魔導具を組み込

んで、創って見る事にした。魔石はメルトダウンの存在しない、核融合炉の様な仕様みたいで、電池何て目じや無い代物だった。

製作時間はおよそ5時間の、簡易グラフ式の分析器が完成したのだ。アミッドが居て良かったよ神秘が無いと、魔導具の謎理論には応用が効かない。

計測するのは濃度と魔力飽和度など、ポーションに必要な要素を勝手に数字を振って、セットすると計測を開始して、流れるコンベアの上を通過するポーションの結果を、心電図の様に針が動き紙に記載する様なかなりアナログな機械ではある。

良品の数値を勝手にゼロにしたので、簡単に言うならより振り幅が上方向に、行く物を製造し研究する事で、ポーション界の革命である。

今日の製作中にある事をも、副産物として知ることになったのだ。リユーとアミッドは仕事出来る男性に弱いと言う事だ…。

作業が終わって言われたのが、真剣に製作している姿が乙女心を、作業中に何度も熱い視線を感じていたのだから嫌でも気付く。

アイズは直感型なので、そう言った事は無いのだが一つだけ弱点を見つけた、それは俺がお前を守るとか、俺はお前の英雄だからなと言うと茹でタコになっってしまう。

そんなアイズは手で顔を隠して居るが、指の間から見て来ると言う超が付く可愛さ、その指を無理矢理開いて見たら「バカ」を連発し出す。

「アイズ凄く可愛いよ」

「…バカ」

「アイズ質問するから答えて欲しい」

1. 俺が女の子と手を繋いで歩いてる、どう思う
「嫌!？」

2. 俺が他の恋人を作る

「…嫌だ」

3. 俺が誰か別の人と結婚する

「……………やだ…嫌だ」

4. アイズは俺に恋してるのか？

「えっ……………／／／／」

5. キスしたらどんな気持ち

「ふわふわ……………幸せ？」

6. 俺を愛してるって目を見ながら言ってる？

「……………ベル…愛して／／／／」

アイズは虐めると可愛いから、つい虐めてしまうのだが虐め過ぎると暴走し出す…。「沢山答えたご褒美」を要求して来て2時間くらい、俺の上に乗リキスを要求してきたのだ。

その後は不公平ですと言う抗議を受けて、その結果夕食前まで纏わり付いて来た。女性陣が入浴している時に来客が来たのだ…。

「この様な時間に申し訳ありません…ヘルメス様からの言付けで、イシユタルファミリアの情報で、へ

ステイアファミリアに関する問題が起きたら知らせよとの事で、こちらが内容になりますけどどうぞ宜しくお願いします」

俺はヘルメス様の眷属が持つてきた資料に、目を通すとイシユタルが俺の神を殺せる能力が欲しく、接触して魅了してしまう算段の様だ。

——イシユタルの策略

翌日の朝

俺は団員達を全員集めて、イシユタルの件を伝えてダンジョンや街に行く際は、Lv3を3人伴うかLv3を1人とリユールと一緒に行動する事を徹底した。

アイズは神様を守る様に、お願いをしているのだがそれでも恐らく何かしら仕掛けて来るだろう…。籠って待つよりこちらから招待されてやろう。

完全装備でホームを出る際、俺が戻るまでは警戒を強める様に言う。屋根を翔けて色街にある宮殿ベレト・バビリに急ぎ向かう…。

神の気配を感じる場所には、多くの気配がある上に【^バ戦闘娼婦^ラ】が警戒態勢で色街を徘徊しているのが見える。俺は原作で道案内をしていた春姫を探す事にして、屋根から窓をしらみ潰しに見て行く。

そして外をどこか寂しそうに眺める「狐人」が目に入った。その窓の淵に飛び乗ると、彼女は目を見開いてこちらを見て居る。

「こんばんわ、可愛らしい方ですね…道をお聞きしたいのですが良いですか？お礼に貴方をそこから救って差し上げます」

「え!?どう言う事でございますか…私はただの娼婦で貴方様に救って頂く、価値などございませんで、対価は必要ありません」

「では、俺が救いたいからそうしますね…動かないで下さいね『原初の業を我に』【終焉と起源】首輪を切ります」

「無理でございますよ、この首輪は魔導具ですので付けた者のみしか外せません」

「では、見て居て下さいね」

俺は刀の刃で首輪の金属部分を、撫でる様に斬り下ろすと、金属音もせずに首輪は存在を失って行くのだった。成功して良かった、行けるのだと思いは首輪の存在を否定した。

生物でないからなのかは分からないが、苦痛も存在しなかった。春姫は自分の首に手を触れて、震えながら俯くと光る雫が膝に落ちる…。

そんな彼女に俺は、後は貴女と共にここを離れてしまい、イシユタルから解放するだけです。それまでは今迄の事を思えば、ほんのひと時だと伝えてから彼女を抱え窓から屋根に飛び移る。

「宮殿ベールト・バビリにこっそり入りたいのですが、道案内お願いしますね」

「危険でございます…沢山イシユタルファミリアの

団員がおります」

「お姫様は、黙って王子を待つて居て下さい、俺が負けるなどあり得ませんよ。英雄は窮地ほど強くないと行けませんからね」

「——ッ／＼はいっ王子様」

「クスクスッ：ではお散歩に参りましょう」

俺は彼女に道を聞きながら、イシユタルのホーム脇に流れる川に案内されると、川の横に小道が見えるので彼女を見ると頷いて来る。

「では、お姫様しばしのお別れですが直ぐに戻って

参ります。反対方向に見えるあの桜の下に、居て下

さいね迎えに行きますから」

「はい…お気を付けて」

春姫は別れ際に手をぎゅっと握り、安全を願う様な素振りを見せると、手を離し涙目ながらに笑顔で見送って来れる。

小道を進んで行くと、奥の方から「ゲゲゲツ」と言う声と共に、男の叫び声が反響して聞こえる。刀を抜刀して【精霊の威厳】で気配の方に突貫して行くのと、相手が振り向く前に四股を斬り飛ばす。

「グゲエ——」

「煩いカエルですね」

「グヘゲエ——」

「相手は壊すが、壊されるのは文句言う気です？」

「あっアンタは誰だい!?アタイの美しさに魅入っ

た奴が、嫉妬でもしたんだろうがアタイは一人の物になる程、安い女じゃ無いヨオ」

「手足無いのに元気ですネ…流石は妖怪ですね」

「だっ誰が妖怪ダアア!?!」

「妖怪非綺ガエルでしょ?時間無いので終わりにしますね」

俺は妖怪ヒキガエルを、ギロチンにはめ込んでからロープを、ヒキガエルの口に棒で突っ込む。離すと死ぬから頑張つてと言うといい、刃に重りを付けてから去って行く。

【精霊の威厳】を使って、廊下の壁をアマゾネスを

避けて走る。最後の扉も躊躇無く開け放つと、変態

神は一糸纏わずにそこに居た。

「俺に会いたいらしいから、来てあげましたよ?消

滅希望です…それとも送還希望?」

「どっどうしてここに貴様が居る!?!」

「そう言えば、何で俺の事が必要何ですか?」

「あの忌々しいフレイアを消す為だよ!」

「人間を使わず自分でやれば?」

「出来るならとつくの昔にやってる!?!」

「分不相応って言う言葉、知らないんです?」

「人間風情が偉そうに!アンタ達は恩恵の代償を払う義務があるんだよ」

「下界で生活させて貰う対価として、恩恵で払ってるのは、お前の方だからな?ガイアが要求するなら

100歩譲って分かるが、何偉そうにしてる?」

「なっガイアって誰なんだ知る訳無い…私は豊穰と性愛を与えてるわ」

「豊穰はフレイアでいいし、性愛はエロスでいいん

で要らないですよ？どこに豊穰が存在するんですか…性愛って自分が楽しんでどうする、性愛って言うのを文字の通り、愛が存在して言うのでは」

「何なのアンタは！魅了が効かないなんて何で」

「質問良いですか？穢れた精霊は何処に居る」

「何でアンタが知ってるんだ！？知らないさ闇派閥の連中に聞きな」

「俺が全員、片付けたから聞けないんですよ？」

「…嘘じゃない…どうやって」

『「原初の業を我に」【終焉と起源】今から体験し

ますから、安心して下さい」

「まっ待て！？欲しい物は何でもやるから、何だったら抱かせてやるから」

俺が刀を構えると、死にたく無いと懇願して来たがこいつは、春姫を平気で殺そうと考えた。人に慈悲を請う前に己が慈悲を持って欲しい…。

その後金庫に行き、中身をバックパックに入れてからアイシャ・ベルカを探す。見付けると団員を広間に集めてくれたら説明すると伝えた。

その間に俺は、春姫が待つ桜の下に向かって歩いて行くと、涙目でこちらを見ると、走って来て飛び付いて来る…。

「お待ち…：…して居りました」

「もう安全だから一度、他の団員達に説明してあげるつもりだから、一緒に行こうか？」

「はい！喜んで」

俺はまず行うのが、強要されて娼婦になった者達が居るかどうかだった。4人だけだが実際に居たみたいで俺は怒りが込み上げた…。

俺の魔法がどんなモノか、正確に把握が出来て無いのが現状で有るが試す事にする…。足首のナイフを取り『原初の業を我に』【終焉と起源】を使って望むのは、身も心も無傷な頃をと望んだ。

そうして、傷付いた者の手にナイフを突き立てる事で、俺には彼女の記憶が流れ込む、不快な記憶が一度にやって来る。

彼女の身体は輝くと、イシユタルに入る4年前の姿らしいが戻った…。当然これを見て若返ると思つて嘘を言う者が出るので、俺はある事を言った。

「俺に嘘の申告や、欲望のみで俺に刺されるとイシ

ユタルの様に、無に還るから」

「あ……ありがと……ううう」

俺が直したのは、4名のみでこの能力を他者に口外した場合、死者に夜中地獄へと連れて行かれる。そう言うのと、悪巧みする者は青ざめた。

今後も色街に残りたい者、冒険者を続けたい者に一般人を希望する者に別れて貰った。一般人の希望はごく僅かで、冒険者と言う者が多かった。

色街希望は4割で、その者も自衛や色街運営が必要

なので、一時的にヘステイアファミリア預かりとし彼女達を守ると伝えた。

ルールだけは伝えて、色街希望の子達は解散して行く事にした。その際に名簿作成をアイシヤに頼んで行き、一般希望の者も名簿に名前を残し気を付ける様に言う。

最後の選択である冒険者、ここで提案したのはヘステイア様が、受け入れるチャンスが欲しい者を募つて見ると、希望は8割と言う状況だ…。

一旦全員を連れて、ホームに向かう事にするのだが38人も居るのだから、嫌でも目立ち俺は有名な事もあるために、今度は何だと囁かれて居るのだ。